

づ方へか去る。又知らず、かりのやどり誰が爲にか心を惱まし、何によりてか目を悦ばしむる。其のあるじとすみかど無常を争ふさま、いは朝が波の露にことならず、あるは露おちて花残れり、残るといへども朝日にかれぬ。あるは花はしほみて露なほさぬす、消ぬすといへども夕を待つことなし。

花村院玄僧正の事 『撰集抄』

凡そ人の習世を背くまでも、骨をば埋むとも、名をば埋むまじと思ふめる。殊に此の僧正のよしなき色に耽りて寺を離るゝよしのいつはりを述べられけむ心中、思ひやられてわくかたなく哀に侍り、止觀の文かどよ實を隠し狂を顯せと侍るは、是れならむと覺えて侍る。しかれば、もろこしにも、此の國にも、げにしく世を通るゝ人は、皆箇様に侍るとかや。げに人にはつたなきものと思ひくだされて、心一に思ひすまして侍らむは、いみじくすみ渡りてぞ侍るべき。さて又あちこちさそらへゆかむに、心になはぬところあらば、思ひはなるゝぞかし。なんぞ、すゝろに床敷侍り、世をすつとならば、かくこそあらまはしくて、身の力もいたくつかれ侍らざりし頃、廣

く國々經まはりて、やん事なき寺々面白き處々徘徊し侍りしが、指當りて身の憂さも忘られ侍りしかば、かくて一期を過したらむも罪深からじと覺侍りき。況や發心堅固にして、心もかしこくさえあらむ人の、なじかは心もすまで侍るべき。越の白山雪積りて、老會の森の帚木風に靡きやすく、佐野の野原のはやのすゝきそよめきて、同じ心の末葉の露は風に亂れてしどろなる有様、木曾のかけ橋、佐野の舟橋など見侍りしに、心もどゞまるべき程なり。逢坂の關のせき守とめかねし秋こし山のくすもみぢ見過しが、たく、濱千鳥の跡ふみつくる鳴海、瀧富士の山邊は時知らぬ鹿の子まだらの雪のこり、浮嶋が原清見が關、大磯小磯の浦々は過ぎがたく侍るぞや。

第四節 戰記文 附雜史

平安時代に於いて雜史と名づけしものは、既に『大鏡』『榮花物語』等の數種ありて、大方皆小説的物語の體裁に倣ひ、史的事實に多少の粉飾を施して讀者の嗜好に投ぜしことあり

しは、曾て前に述べたり。この時代には、源平二氏の合戦を経て、人々皆文弱を排し勇武を事とせしかば、事件も勇ましく文勢も健かなる戦記文、世上に歓迎せられたり。こゝに戦記文とは、『保元』『平治』『平家』等の物語及び『源平盛衰記』等といふ。

戦記文の文章は、前期の雑史體のに比すれば、進歩の跡頗る著明なり。語勢遒強にして變化自在なるに加へて、章句簡潔行文快暢、巧に和漢雅俗の言語を折衷せり。かくて文詞豊富なるからに、或は莊重急激、或は細緻哀切、漢文の語勢をとり、國語の脉を追ひ、波瀾頓挫意に任せ、讀誦の間おのづから聲をきゝ、色を見るが如きものあり。要するに、戦記文は鎌倉時代の文學中最も重要な位置を占むるものとす。

『保元』『平治』の物語の作者は、共に詳かならず。或は葉室時長

の作ならむといふ説あり。時長は藤原時光の子なり。其の閱歴詳かならず。『保元物語』には保元年間に於ける兵亂の顛末を載せ、『平治物語』には平治年間に起りし騷擾の首尾を記せり。かゝれば、二書題名を異にしたりと雖も、壹部正續二卷なるかの觀あり。篇中に於ける重要な人物に就きて、勇怯剛臆善惡正邪等の性情の多少活動せる趣あるは、二書共に異同あることなし。和漢の先蹤古聖賢の言行を引證して、書中の人物事件を評論するところ、作者の博覽を觀るに足る。若しそれ人智を以て測度しがたきに逢ひて忽ち不可思議なる神佛の功力を説き、現世の成敗を見て過去の業報に歸するが如き、宗教的信念の全部に一貫したるは、前に本期の他の作者について説明したるに同じ。文章は、二書共に質樸にむで、稍典雅の風あり。此の頃より後世に所謂道行と呼

べる文見えたり。

『平家物語』と『源平盛衰記』とは『保元』『平治』の體裁を學びながら、文辭は一層優美艷麗に、結構は一段雄大高遠の域に進める者なり。此の二書また作者を詳かにせず、世に出てたる先後につきても、古來未だ正確なる定説あらず。『平家』及び『盛衰記』に載するところ、比較上簡短繁冗の別はあれど、其の記事の略同一なるが如く、古今東西の故事先蹤に典據し、儒佛の教理によりて案を斷ずる趣は、二書互に相似たり。殊に、全篇を通じて無常なる世相を示さむと務むる形跡あること、二書また相如けり。然れども、全躰の結構と文辭の詩情を得たる點に於いては、『平家』優り、行文の細密意匠の周匝なる邊に於いては、『盛衰記』優るべし。之を『保元』『平治』に比較するに時として浮華に流れ纖巧に失せる弊はあるも、全

躰に於いて精神の快暢なる、殊に『平家物語』が一種の律呂を具へたるは、彼等の遠く及ばざるところなり。

戦記文の外、雑史に『十訓抄』と『古今著聞集』とあり。『十訓抄』は建長四年の作なれど、著者分明ならず、種々の事實を彙集して十目を立て、以て世俗の教訓とせるものなり。『古今著聞集』も、編輯の體裁は『十訓抄』に同じけれど、是れは教訓を目的としたるあらず。二者共に、文章質樸にして虚飾なく、事實も大半信憑すべし。『著聞集』の著者は、橘成季といひて、後宇多天皇の御宇の人なり。其の傳は詳かならず。

爲義降參の事(保元物語)

義法房子供に向ひて宣ひけるは、我が身が合期したらばこそ、各引具して山林にも立隠れめ、われは、義朝をたのみて都へ出でんと思ふなり。さても、今度の勳功に申し替へても命ばかりは助けこそせんすらめ。但し、悉に院方の大將軍承りたれば、勅命重くして、助かりがたからんか、それ又力なき

事なり。齡既に七旬に及び惜むべき身に非ず。万一甲斐なき命助かりたらば、如何にもして汝等をも助くべし。面々は先づ如何ならん木の陰岩の間にも隠れ居て、事鎮まらん程を待つべしと宣へば、爲朝聞きもあへず、此の義然るべからず候。縦令下野守殿こそ親子の間なれば助け申さんとし給ふとも、天氣よも御免候はじ。其故は、新院はまさしく主上の御兄にて渡らせ給はずや。左府亦關白殿の御弟ぞかし。豈親とて罪科なからんや。義朝いかに申さるゝとも、立ちがたくこそ覺え侍れ。御所勞なほりねはしまさば、只何ともして關東に赴き、今度の合戦に上り合はぬ。三浦介義明、島山莊司重能、小山田別當有重等を相語らひて、東入箇國を管領して暫しもおはしますべし。若し京都より討手下らば、爲朝一方承りて、思ふまゝに合戦して叶はずば、其時討死すべし。なごか暫く支へざらんと申しければ、それも東國へ下りつきての事ぞかし。落人となりぬれば、何事も思ふに叶はぬものなれば、降參せんと宣ひて、既に山より出で給へば、子供泣くく供しつゝ、西坂本下松を下りしかば、篠目漸く明け行きて、鳥の聲々告げわたり、峯の横雲晴れば、入道疾くく何方へも落行くべしと宣ひて、都の方へ赴

き給ふを暫く御待ち候へ申すべき事候ふと聲々に申せば、何事にやと立歸り給へば、前後左右に立圍みて泣くより外の事ぞなき。誠に只今をかぎりにて、又逢ふべき事ならねば、餘波を惜むも理なり。入道今度老の頭に兜を戴きて合戦を致す事、全く我が身の榮花を期するにあらず。若し打勝ちて運開かば、汝等を世にあらせんと思ふためなり。今義朝を頼みて出づるも、我れ若し安穩ならば、其の蔭にて各をも助けばやと思ふ故なり。汝等を捨て、我れ一人助からんと思ふらん。齡既に致仕に餘れば、身の後榮何をか期せん。如何ならん處にも深く隠れて待つべし。疾くくとして下られけるが、かくて心強くは宣ひしかども、さすが餘波や惜しかりけん。又立歸りて、頼賢と頼仲よ、いふべき事あり。歸れと宣へば、各呼ばれて立歸る。誠には異なる事なけれども、あかねわかれの悲しさに、又呼び下し給ひける恩愛の程こそ哀なれ。如此互に別を慕へども、さてあるべきにあらざれば、面々は散りくく、にこそ別れ行く。落つる涙に道昏れて、行く先更に冥々たり。悲しきかな、人界に生を受けながら、鳥にあらねども、四鳥の別をいたし。あはれなるかな、廣切の契空しくして、魚にはなけれども、釣魚のうらみを合ひ

涙欄干として魂飛揚すと見えて、哀なりし有様なり。

石橋山合戦の事『源平盛衰記』

廿三日の誰彼時の事なれば、敵も味方も見分けがつかず、與一は文三を呼びて、家安備に聞け、我は相構へて大塲、俣野が間に組まんと思ふなり。くむ程ならば、急ぎ落合ひて敵の頸をとれ。此間の勞れに力無く覺ゆれば、兼て云ふぞと云ふ。文三誰もさこそ存じ候へ。殿の大塲にくみ給は、家安は俣野、我が大塲に組み候はば、殿は俣野にくみ給へとて進む處に、岡部、彌次郎、與一に組まんと志して、鹿毛なる馬に乗つて馳せ來る。與一は岡部とは思ひよらず、大庭が俣野かと思ひ、馳せよりにて胃のてべんに手を打入れて、鞍の前の輪に引付けて、首を掻き取上げ、雲透に見れば、思ふ敵にはあらずして、岡部、彌次郎なり。あな無慙や、鹿待つ處の狸とは此事にや、なにしに來つて、義貞に討たるらんとて、首をば谷へぞ抛入れける。與一が乗りたる馬は、白草毛太く逞しさが七寸に餘りて、鼻のさき、狐の花の如く白かりければ、名をば夕顔と云ひ、東國一の強馬なり。もと三浦介が許に有りけるが、餘りに強くて、轡に乗る者もなかりけるを、岡崎所望して乗りけるが、それも進退し

煩ひけるに、與一ばかりぞ乗り隨へたりける。されども岡崎持和けて、三浦へ返したれば、本の栖へ歸りたりとて、都返りと名付けたり。佐奈田折節馬なくて、又乞返したれば、古巢へ歸りたりとて、鶯ども呼びけり。元來つよき馬なりけれども、己が力を憑みつゝ、出雲轡の大なるに、手綱二筋より合せてぞ乗つたりける。岡部、彌次郎が頸切りける時、鎧武者の身の落つるに驚きて、つと出て走り行く。さるものぞと心得て、引留めん引留めんとしけれども、此馬の癖として、口をば主に打かれて、何にて走る馬なりけり。猶ほ留めんと引く程に、手綱三つに切れければ、左右の水付とらへたり。左右の水付引もぎて、心の儘に引きて行く。大塲の三郎は、弟の俣野五郎に、構へて與一に組み給へ。景親も目に懸からばくまんするぞと云ふ。俣野は餘りに暗くて、敵も味方も見えわかず、與一も何やらんといへば、與一が鎧は据金物の殊にきらめきて、馬の毛も白かりき。白き幌を懸けたりつれば、いちじるかりつるなりと教ふ。俣野歩ませ出す。與一馬に引かれて近づきたり。俣野敵のよすと思ひければ、佐奈田、與一、義貞と名乗りつるは落ちぬるかど叫びけり。無下に近かりければ、義貞こゝにあり。問ふは誰ぞ。俣野五郎、景尙

名乗るや運き押並べて馬の間へ落重なる。上になり下になりはね返し  
もち返し、山のそばを下りに、大道まで四段計りをころびたる。今一返しも  
ころびなば、互に海には入りなまし。俣野は大力と聞くに、いかゞしたりけ  
ん下に推付けられて、うつぶしに臥し、頭は下に足は上に、起きん」とし  
けれども、俣野力なかりけり。與一は上にひたと乗り得て、義貞敵に組みた  
り。落重なれ」と叫びけれども、家安を始めとして、郎等ども、押隔てられ  
てつらく者なし。俣野今は叶はじと思ひて、景尙佐奈田に組みたり。ついで  
やついけと叫びけるに、長尾新五聲に付きて、落合ひて、上や敵、下や敵と問  
ふ。與一は上に乗りながら、かくいふは長尾殿歟。上ぞ景尙、下ぞ與一。あやま  
ちし給ふなど云ふ。俣野下にて、上ぞ與一、下ぞ景尙、誤すなど云ふ。頭は一所  
にあり、くらははくらし、聲は息突きて分明に聞分かす。上よ下よと論じけ  
れば、思ひ侘びてぞ立つたりける。俣野あな不覺の殿や聲にても聞知りな  
ん。鎧の毛をも搜り給へかしと云ふ。長尾賊にと思ひて、鎧の毛をぞ搜りけ  
る。與一あらはれぬと思ひて、右の足を揚げて、長尾をむすど韜む。ふまれて  
下りに、弓長三杖ばかりと走りて倒れにけり。其間に、與一刀を抜きて、俣

野が首をかく、掻けどもく、切れず。指せどもく、透らず。與一刀を持揚げて、  
雲透に見れば、さや巻のくがたかけて、鞘ながら抜けたりけり。鞘尻く  
はへて、ぬかぬかんとしけれども、運の極めの悲しさは、岡部彌次郎が首  
切りたりける刀を拭はすさやに差したれば、血詰りして、抜けざりけり。長  
尾新五が弟に新六落合ひて、與一が胡篋の間にひたと乗得て、胃のてべん  
を引仰のけて、頸をかく。無慙と云ふも疎かなり。俣野を引起きて、いかに手  
や負ひたると問へば、くびこそ重く覺ゆると云ふ。頸をさぐればぬれく、  
とあり、手負ひたるにこそと、與一が刀を見れば、鞘尻一寸ばかり碎けたり。  
つよくさしたりと覺えたり。其後、俣野は軍はせず。佐奈田與一は俣野五郎  
止めたりと叫びければ、源氏方には惜みけり。平家方には是を悦びけり。

小原御幸 『平家物語』

かゝりし程に、法皇は文治二年の春の比、建禮門院の小原の閑居の御すま  
ひ御覽せまはしう思召されけれども、ささらさやよひの程はあらしはげ  
しう、餘寒もいまだつさず、みねの白雪たえやらで、谷のつらうもうちどけ  
ず、かくて春すぎ夏立ちて、北祭りも過ぎしかば、法皇夜をこめて小原の與

へ御幸なる忍びの御幸なりけれども、供奉の人々には、徳大寺、花山院、土御門以下公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。くらませほりの御幸なりければ、かの清原の深養父がふだらく寺、小野の皇太后宮の舊跡、叙覽ありて、それより御輿にぞめされける。遠山にかゝる白雪は、ちりにし花のかたみなり。青葉にみゆるこずゑには、春のなごりぞをしまる。卯月廿日あまり事なれば、夏草のしげみがすゑをわけいらせ給ふには、はじめての御幸なれば、御覽じなれたるかたもなく、人跡たえたる程もおぼしめししられてあはれなり。西の山のふもとに一字の御堂あり。すなはち寂光院これなり。古つくりなせる泉水、木だちよしあるさまの所なり。薨やぶれては霧不斷のかうをたき、とぼそおちては月常住のともしびをかゝぐども、かやうの所をや申すべき庭の若草しげりあひ、あをやぎ糸をみだりつゝ、池のうき草なみにたゞよひにしきをさらすかどわやまたる。中じまの松にかゝれる藤なみの、うらむらさきにさける色、あをばまじりのおそさぐらは、つ花よりもめづらしく、さしの山吹さきみだれ、八重たつ雲のたえまより、山はとゞぎすの一二ゑも、君のみゆきをまぢがはなり。法皇これを叙覽あつて、

かうぞあそばされける

池水に みぎはの櫻 ちりしきて 波の花こそ 盛りなりけれ

ふりにける岩のたえまより、ちくる水のおとさへ、ゆゑよし有る所なり。縁羅のかき、翠黛の山、繪にかくとも、筆もおよびがたし。さて女院の御庵室を叙覽有るに、檐には、葛朝顔はひかゝり、しのぶまじりのわすれ草、瓢箪しばく、むなし、草顔淵が巷にしげし、藜藿ふかくとさせり。雨原窓がとぼそをうるはずともいひつべし。杉のふきめもまばらにて、しぐれも霜もおく露も、もる月かげにあらそひて、たまるべしとも見えざりけり。うしろは山まへは野邊、いさゝをさゝに風、さわぎ世にたへぬ身のならひとて、うきふししげき竹ばしら、都のかたのおとづれば、まごほにゆへるませがきや、わづかに事とふ物とては、みねに木づとふ猿のこゑ、しづがつま木の斧のおど、是らがおとづれならでは、まささのかづらあをつら、くくる人まねなる所なり。法皇、人や有るく、とめされけれども、御いらへ申す者もなし。

可庶幾才能事 『十訓抄』

或人云く、本より其道々の家に生れぬれば、さる事なり。さなき類も、程々に

付けては能はかならず有るべきなり。中にも氏を受けたる者藝おろかにして氏をつがぬ類あり。道にあらざる類。能によりて道にいたる徳もあれば、氏をつがぬがため。道にいたらんがために、彼も是もともにはげむべし。何となくのまじはりたる折は、そのけぢめ見えざれども、藝能に付けてめし出されたうちある我どちのあそびかたへにぬきいで、何事をもしたらんは、雲泥の心地して、人目いみじく覺えぬべし。すべて身もよく品高ければ、もあやしきが能あるに立ならぶ折は、その品その見めもかならず思ひけざるものなり。たとへば花のあたりのときは、木は、うちみるにたとへなくさめたれども、春の日かすくれ、峰のあらし過ぎたる後に、みどり計り残りて、かりの匂ひといまざるがごとし。されば桃李は一旦の榮花なり、松樹は千年の貞木なりといへり。いみじくありてみの能なきが一人あるを見るだに、能あるを思ひ出るならひなり。いはんや、能にならぶ折のけぢめをや、何ぞ況や、同様なるが、一人は能ありて一人は能なきをや、中にも世の中のかはり行くさま、むかしよりは次第におどろへもて行くに付けつゝ、道々の才藝も、又父祖には及びがたき習なれば、藍よりも青からんと

はまことに希なりといへども、形の如くなりとも、箕裘の業をつがざらん、口惜かりぬべし。

中納言左衛門督伊陟卿は、二品中務卿兼明親王の御子なり。村上の御時近く召仕はるゝ間、主上仰せられて云く、故宮は常に何事をかせられし。伊陟うさぎのかはごろもごかや申す物をこそ、常はもてあざれば侍りしかと申されければ、定めて傳へられたるらん、一見せばやと仰事あり。やすく候とて、後日に封つきたる文を一巻もて参られたり。主上羨などにやとおぼしめしけるに、文なり。ひらきて御覽じけるに、君昏臣諛無所于慙といふ句あり。文旨の間これをしらす、取出で給へりけり。さる才藝の人の子にも、かゝる人おはしましけり。菟裘賦と云ふ名をたにも知り給はざりけるにや。

## 第五章 日記及び紀行

鎌倉時代に日記と稱すべきものは、只『辨内侍日記』と『中務内侍日記』との二書なり。源光行の『海道記』、其の子親行の『東



關紀行』並に阿佛尼の『十六夜日記』などは、紀行の文に屬せり。此の中、『辨内侍日記』『中務内侍日記』及び『十六夜日記』は、女子の手になりしことにて、優美なること殆ど平安時代の近くに、『海道記』と『東關紀行』とは男子の手に成りしことにて、勁拔なること當代の隨筆さては戰記文等に似たり。

『辨内侍日記』は、中務大輔藤原信實の女の筆録にかゝれり。著者の閱歴は分明ならず。此の日記別に、『後深草院辨内侍家集』と稱せり。蓋し、事實は日件なれども、文は寧ろ歌の序詞めきたるものにて、家集に類したるよりの名にてもあるらむ。

後嵯峨院、寛元四年正月二十九日富小路殿にて御讓位ありしに起筆し、建長四年十月まで殆ど七年間に涉れり。文章枯淡にして他奇なしと雖も、禁中に奉仕せる縉紳官女の風俗歴々として見るべし。篇中の歌亦平板にして情味乏しき觀

あれど、風姿の暢達は是れありとす。

『中務内侍日記』は、宮内卿永經といへりし人の女にて、中務内侍たりし婦人の手に成れり。内侍の閱歴また詳かならず。此の書は故後深草院を追悼し奉ることより書きはじめて、伏見天皇の正應五年までの間、著者が禁中にありて見聞せる事どもを記載せり。當時の御幸のさま、さては伏見天皇御即位の次第、大嘗會の儀式等、朝廷式微の間にありながら、なほ大禮として辛くも執行せられける様、一々窺ふべし。

『海道記』及び『東關紀行』は、題名の既に表明する如く、京都より東海道を経て鎌倉に至れる紀行あり。其の作者源光行と親行とは父子なりきと雖も、其の傳共に詳ならず。光行は後堀河天皇一八八二—一八九二在位の頃、親行は四條天皇一八九三—一九〇二在位の頃の人なり。『海道記』の文は六朝

八衢の躰を學べる趣見えて、稍煩瑣の風あれど、『東關紀行』は平易にして明快なり。

『十六夜日記』は阿佛尼の著はしたるものあり、阿佛尼は法名をまた北林禪尼とも稱せり。平度繁の女にして、四條も右衛門佐ともいひき。初は順徳天皇の皇后安嘉門院邦子の方に仕へて侍女なりしが、藤原爲家（藤原）に嫁して爲相爲守等を生みたり。此の書は爲家の歿後、爲相に譲るべき播磨國細川莊を異母兄なる爲氏の押領せしかば、後宇多天皇の建治三年阿佛尼之を鎌倉の執權に訴へむとて、東下せし時の道の記なり。故に、此の書は常に路次見聞の山川又は事物を冷然漫録せることは甚だ異なりて、阿佛尼が子を思ひ道を思ふ熱情篇中に充溢せり。行文簡にして意長く、優美なる中に毅然たる精神の貫通せるは、此の書の特徴あり。阿佛尼の作は、此

の書の外、なほ『夜の鶴』にて歴代の歌集を評論せるもの及び『乳母之文』『阿佛口傳』あり。或は彼れが歌學の意見を見るべく、或は彼れが婦道の懷抱を察すべし。弘安六年鎌倉にて歿しぬ。享年詳かならず。

鳴海浦（海道記）

此うらをはるかに過ぐれば、朝には入海にて、魚にわらずば遊ぶべからず。晝は鹽干瀉なれば、馬をはやめて行く。酉天は溟海漫々として雲水蒼々たり。中上には一葉の舟幽に飛んで、白日の空にのぼる。彼の仮男の船中にて、なごや老いにけん、蓬萊の嶋は見ぬすとも、不死の薬はとらずとも、波の上の遊興は一生の歡會なり。是れ延年の術にわらずや。

老せぬと、心をつねに、やる人ぞ、名をさくしまの、薬をもうれ、猶ほ此干瀉を行けば、小蟹ども己が穴々より出て、養きわそふ。人馬のわしにわわて、横におどり平さまに走りて、己がわなくへ、逃入るをみれば、足の下にふまれて死ぬべきは、外なる穴へ走りて命いき、外に恐れなきは、

足の下なる穴へ走り来て踏まれて死ぬ。憐むべし。煩惱は家の犬のみにあらず、愛着は濱の蟹なるべき事を。是を見てはかなくおもふ我々かしこしやいなや、生死の家に着する心は、蟹にもまさりてはかなきものか。

誰もいかに 見るめあはれと よる波の たよふ浦に 迷ひきにけり  
 山かさなりてまた重りぬ。河へだよりてまたへだよりぬ。ひとり舊里を別れて遙に新路におもむく。しらす、いづれの日か故郷にかへらん。影をならべゆく道づれば、あまたあれども、心ざしは必ずしも同じからねば、心に准ずる氣色は、友をそむきて似たれども、折にふるゝ物のあはれは、心なき身にもさすがに覺えて、屈原が澤に呻ひて漁夫が嘲を恥ぢ、楊岐路になきて騷人のうらみをいだきけんも、身のたごへにはあられども、逆旅にして友なきあはれには、なにとなくこゝろぼそく、そらにおもひしられて、

露の身を おくべき山の かげやなき やすき草場も あらしふきつゝ

菊川より清見が關までの道『十六夜日記』

廿五日、菊川を出で、今日は大井川といふ河をわたる。水いとあせて、聞きしにはたがひて、わづらひなし。河原幾里とかや、いとほるかなり。水の出で

たらんおもかげおしはからる。

思ひ出づる みやこのことは 大井川 いく瀬の石の かずもおよばじ  
 宇都の山越ゆるほごにしも、阿闍梨の見知りたる山伏行き逢ひたり。夢にも人をなご、昔をわざとまねびたらん心地して、いとめづらかに、をかしくもあはれにもやさしくも覺ゆ。急ぐ道なりといへば、文も數多は得かゝず。唯やんごとなき所ひとつにぞ、音信さこゆる。

わが心 うつゝともなし 宇都の山 ゆめにも遠き ひかしこふとて  
 つたかへで しぐれぬひまも 宇都の山 なみだに袖の 色ぞこがるゝ  
 今宵は手越といふ所にどゝまる。某の僧正とかやのぼり給ふとて、いと人しげし。宿かりかねつれど、さすがに人のなき宿もありけり。

廿六日、薬科川とかや渡りて、息津の濱にうち出づ。なくく出でし跡の月影などまづ思ひ出でらる。晝たち入りたる所に、惟しき黄楊の小枕あり。いと苦しければ、うち臥したるに、硯も見ゆれば、まぐらの障子に臥しながら書きつけつ。

なはざりに みるめばかりを かり枕 むすびおきつと 人にかたるな



暮れかゝるほど、清見が關を過ぐ、岩越す浪の白き衣をうち着たるやうに見ゆる、いとをかし。

きよみがた 年ふる岩に ことゝはん 浪のぬれぎぬ いくかさね着つ  
 はどなく暮れて、その邊の浦近き里にとゞまりぬ。浦人の所爲にや、隣より  
 くゆりかゝる烟、いとむづかしきにはひなれば、夜のやどなまぐさしとい  
 ひける人の詞も思ひ出でらる。よもすがら風いと荒れて、浪たゞ枕の上に  
 立ちさわぐ。

ならはずよ よそに聞き來し 清見瀉 わらいそ浪の かゝるぬぎめは

## 第五編 室町時代の文學

## 第一章 總論

室町時代とは、後醍醐天皇の延元元年足利尊氏幕府を京都室町に開きし頃より、後陽成天皇の慶長八年徳川家康征夷大將軍となりし時までをいふ。其の間およそ二百六十餘年なり。

本期の文學は、其の初に當りては、鎌倉時代の風を距ること遠からざりき。即ち、其の厭世的感想を帯びたる、或は勇壯にして武士氣に富みたる、或は材料の嶄新にて通俗的傾向を有せるなど、予輩は之を鎌倉時代に見たり。但し、南北朝對立の頃はもとより、天下一統に歸しての後も、世は太平なるかの如くにして内訌常に絶えず、文學の發達には最も適合せ

ざりしなり。殊に嘉吉・應仁以降を甚しとす。漢學の如きも早く地に墮ちて、僅に京都五山の僧徒が其の命脈を維持せるのみ。然れども、かゝる時代にありても、文學は尙ほある自由なる方向をとりて進みたり。すなはち人々干戈に忙しきが爲に、規律の煩雜なる文學こそは或少数者の手に委せられたれ、其の比較的簡易なるものは、本期の特産としてあらはれぬ。連歌・謠曲・御伽草子の如き、即ち是れなり。是等の文學はさながら偉大崇高の稱をば冠しがたきも、之が嫩芽たる價值は充分に之あり。總じて、本期の文學は、緇流の手に出でたるもの多かりしからに、佛教的趣味を帯びたること、前後無比と稱すべし。

言語は、古風の文學の衰頽すること共に、舊來の格法ますます、壞れて、錯亂の極に達しぬ。既に鎌倉時代にも漢學の講究衰

へたるがために、措辭用語の蕪雜なるものあるに至りしが、當期の言語は更に多數の不熟なる漢語・梵語を加へたり。今日使用せる極めて杜撰なる言語も、多くは此の時代の語彙を承傳せるならむ。されば、かゝる言語を以て綴りたる文章に粗笨あるものありしは、云ふまでもあらじ。然れども、本期の初葉に出でたる隨筆又は雜史の文詞と、中葉以後に見えたる謠曲のとは、莊重なるもの、絢爛なるもの、尠からず。要するに、室町時代の文學は、思想も言語も文章も一様に舊慣を破却して、不羈自由なる新天地に入らむとするものなり。

第貳章 歌謠  
第壹節 總說

室町時代の初葉は、南北朝の兵亂に到るところ修羅の巷となりて、庶民其の堵に安んぜるは稀なりしかども、和歌はさすがに鎌倉時代の餘勢を承けて、さまでの非運に到らざりき。故に、若し其の頃の歌人の數と詠歌の量とにつきて云はゞ、決して前時代の末葉に譲らざるべし。花園上皇をはじめ奉り、兼好、頓阿、宗良親王、淨辨、慶雲等は、當時最も名ありし者なり。其の後に至りても、歌集に載れる歌人の數は殆ど枚擧すべからず。されば、勅撰歌集の如きも、俄に廢滅するに至らず。猶ほ能く數十年の間に、『風雅集』以下の五部を出しき。勅撰歌集の外、家集には頓阿の『草庵集』、兼好の『兼好法師家集』、太田道灌の『慕景集』、東常縁の『常縁集』、後柏原天皇の『柏玉集』、



藤原政爲の『碧玉集』、西三條實隆の『雪玉集』等無慮數十あり。さて、本期に出でたる歌集の数はかくの如く多かりき。雖も、其の所收の歌の品性は、おしなべて鎌倉時代のに比して、だに太く劣れり。殊に勅撰歌集の撰進全く絶えはてたる後の状態は殆と言ふに堪へざるものあり。かの『柏玉集』『碧玉集』『雪玉集』の三者は、當代の末葉には『三玉集』と呼ばれて、『草庵集』と共に世に珍重せられたるものなれど、猶ほ誦すべきもの尠し。畢竟、當時、秘事口訣の弊歌學界を浸潤して、人々無用の穿鑿に従事し、和歌の精神を顧るものなかりしかば、斯道の陵夷をして速かならしめたるなり。然るに、同じ歌界は、此の時代に、所謂和歌とは其の精神と方式とを異にせる他の方面に於いて、未曾有の發展を見たり。



そは、從來單に歌人の玩弄に過ぎざりし連歌が、今や獨立の位置を騷壇に有するに至りしとこそす。又、謠曲といふもの諸種の語り物より發達して、當期の文學に異彩あらしめ、狂言といふもの、亦同時にあらはれぬ。其の詞姿共に味ふべし。こゝに是等を叙述する爲に、本期の歌謠を和歌連歌謠曲の三種に分つ。

### 第貳節 和歌

和歌のますく、衰へゆく間に、先づ公にせられたる歌集を『風雅集』といへり。北朝の光明天皇の貞和二年に、花園上皇の親しく撰録し給へるものなり。此は、當時の歌風、其の詞の艶美ならむを希ふのあまり、卑野に流るゝものあるを慨かせ給ひて、姿情共に『新古今』の瑰麗なる古躰に復せむとの

目的に出でき。然れども、上皇の叡旨は實際に之を『風雅集』の上に見るを得ず、却りて奇僻に流れたる觀ありて、當時の歌人は先に藤原爲兼の撰進したる『玉葉集』と共に、之を排斥せりといふ。されば、其の他の不用意なりし勅撰の如何なるものなるかは、容易に推測すべし。『風雅集』につぎて世に出でたるを『新千載集』といふ。北朝の後光嚴天皇の御宇、延文四年に、二條爲定の撰進せるものなり。『新千載集』出で、僅に四年、同天皇の貞和二年に、二條爲明『新拾遺集』を奏進せり。『新拾遺』につぐを『新後拾遺』といふ。北朝後圓融天皇の永和元年、二條爲遠勅を奉じて撰修に従ひしを、二條爲重其の後を襲ひて、後小松天皇の至徳元年に完成せるものなり。其の後、後花園天皇の永享十二年に至り、飛鳥井雅世『新續古今集』を奉りぬ。之を勅撰歌集の終とす。『古今集』より此の集

に至るまで勅撰の歌集二十一、世に之を『二十一代集』といふ。此の外に、尙ほ『新葉集』といふあり。南朝後龜山天皇の弘和元年に、宗良親王の撰進し給へるを勅撰に准ぜられたるなり。此の集は、元弘以後五十餘年間に於ける南朝の人々の歌を集めたるものにて、中に雄壯卓抜なる者多し。蓋し『新古今集』以來の傑作なり。

さて、是等の歌集に見えたる感想の如何なるものなるかは、云ふを要せざるべし。本期を通じて名ありし歌人に、吉田兼好・僧頼阿・宗良親王・僧慶雲・僧淨辨・冷川貞世・飛鳥井雅世・太田持資・東常縁・西三條實隆等あり。但し、是等の歌人も評隲すべき程の顯著なる特色を具せしにあらず。頼阿・宗良親王・東常縁わづかに傳ふべし。

頼阿(一九五三—二〇三五)は、俗名を二階堂貞宗といひて、下

野守光貞の子なり。二十四歳の頃、叡山に上りて僧となりぬ。天性和歌を好みしかば、藤原爲世に従ひて其の蘊奥を極めつ。其の頃、兼好・慶雲・淨辨と共に和歌の四天王と稱せられき。其の歌は、爲世を師としたる程ありて、聲調流麗にして纖細なるところ多し。然れども、當時以後は二條家の風、一世を靡かし、歌人大方かゝる風體を以て絶好の標準と爲したりしかば、頼阿の歌は草庵躰と呼ばれて、一派を爲すに至りぬ。家集を『草庵集』といふ。別に歌學上の著述に『井蛙抄』あり。永和二年三月十三日、齡八十三にて歿しぬ。

宗良親王(一九七二—二〇四五)は、後醍醐天皇の皇子なり。年十歳にして僧となり、尊澄と號せしが、南北分裂の亂あるに及び、還俗して名を宗良と改め、上野親王或は信濃宮と稱し、諸王臣と共に宗廟を回復せむことを謀りぬ。後村上天皇即

ち親王に勅して中務卿征東將軍となし、四方の賊を討せしめ給へり。然るに、後龜山天皇の晩年に至りては、南朝の式微愈甚しく、詔勅も次第に行はれずなりしかば、再び僧となりて諸國に流寓せり。其の薨去ありしは元中二年八月十日にて、享年七十四なりき。其の歌集を『李花集』といふ。『新葉集』を撰進せしことは、上に述べたり。親王の詠には、措辭の婉曲纖巧なるもの絶えてなく、句々其の胸中の悲憤を語る趣あり。されば、一讀平語めきて膚淺なるが如く思はるゝものも、反覆吟誦するにつれて同感の情を誘ふこと、正に滔々たる二條家の風に反せり。蓋し、親王の境遇かくの如く、其の精神はた常に勤王の一途にありけるを以て、北朝の祿を食みて優遊せる歌人輩のとは、其の趣の異なる所ありしならむ。親王の歌は、以て『新葉集』を代表せしむべく、又南朝歌人の詠を

代表せしむべし。

東常縁(二〇六一—二一五四)は、美濃の人、父を益之といへり。常縁、兄の後を承けて下野守に任じ、幕府に昵近せり。家學として『古今集』の秘事を傳へしかば、後土御門天皇召して和歌再興の道を説かしめ給ひたる事あり。常縁京に留まる事三年、教を受けしもの尠からず。文明三年十二月古今和歌傳授を宗祇法師に傳へしが、其の贈答の文書を『東野州消息』といふ。家集に『常縁集』あり。また、『東野州聞書』といふは、歌道に關する雜録なり。明應三年四月十八日、齡九十四にて卒せり。常縁が歌は、多少真情の籠りたる外、聲調平板にして着想亦常套の中にある。其の詞壇に重視せられたる所以は、専ら古今傳授の如き歌道の舊儀典例に通ぜしによるか。之を以ても、當時如何ばかり和歌の衰微せしかを察するに足る

べし。

春の歌の中に

正三位知家

たがためぞ 賤機山の ながき日に 聲のわやおる 春のうぐひす

戀の歌の中に

權大納言公蔭

ちぎりあひて かゝる思ひや つくばねの みねども人の やがて戀しさ

月前の霞といふ事をよませ給ひける 後醍醐天皇

かげやぞす 月さへ今は 馴れにけり 都にかはる そでのしらつゆ

後醍醐天皇吉野の行宮におはしましける頃歌召されける

に、月前雁を

法眼湛助

あくがるゝ こゝろを月に さきだてゝ 都にかへる 道いそぐなり

千五百番

僧 頓阿

あさ日かけ 匂へる山の さくら花 つれなくさえぬ 雪かどぞおもふ

入道二品親王家五十首歌に雉

同 人

月はなほ かすみでのこる かた岡の わしたの原に 雉子鳴くなり

歸雁を

宗良親王

かへる雁 なにいそぐらん おもひでも なき古里の 山ぞ知らずや

萩の風の吹きける比よみ侍りし

同 人

もの思ふ 人の心ぞ をぎの葉に 風も吹きわへぬ 秋を知りける

朝花

太田持資

あらしふく 高嶺は雲の 色かへて 花よりあくる あさくまの宮

夏月

東常縁

いりあひの 鐘きゝすてゝ 見るほども あかずかたむく 夏の夜の月

鳥雪

同 人

すみよしの 松のあらしの 音さえて あはちの島に 雪を見るかな

第參節 連歌 附併諧

上代より行はれたる連歌は、鎌倉時代に至りて、思想上の連鎖を以て五十句又は百句と連接すること行はれしが、本期の貞治應安の頃に及びて空前の流行を致し、從來久しく地

下の輩若しくは僧侶隱士等にのみ弄ばれしも、今は殿上の間にも注意する者あるに至りぬ。當時、連歌の基礎を鞏固にせむと計りし人は、實に位攝關の榮を極めたる二條良基なりき。即ち、其の手になりし『菟玖波集』は、やがて勅撰の歌集に准ぜられて、世の耳目を連歌の上に注がしめ、『筑波問答』は連歌の知識を世人に扶植して、おのづから斯道の手引草となり、『應安新式』は最も正確に其の形式を規定して、同好の歌人に裨益あらしめたり。蓋し、連歌は、和歌の如く秘事口傳の拘束あるにあらず、用語自在にして、古學の造詣なき者も、容易く之にたづさはるを得たるを以て、此の盛大を致しなるべし。當時行はれたる連歌は、通常の短歌の如く優美婉麗を主としたり。

其の頃斯道の達人として最も名聲ありしもの、良基の外に、

猪苗代兼載の事

周阿救、梵灯心敬、宗硯、兼載、智蘊等あり。是等のの人々に次ぎて、一時連歌道の主權を掌握せしを、宗祇法師とす。

宗祇(二〇八一—二一六二)は、紀伊の人、俗性を飯尾と呼べり。猪苗代兼載に就きて連歌を學びぬ。業成るに及びて、當時又肩を比ぶる人あかりしかば、朝廷花の本の號を賜ひて之を賞せり。花の本の號此に始まる。平素旅行を好み、四方を漂遊して曾て定居なし。文明十二年三月武藏國隅田川の邊に寓して、終夜連歌の道を語りしことあり、其の記を『吾妻問答』といふ。古今に於ける連歌の變遷を論じ、或は本歌のこりやう、『源氏』の付け様など、其の他種々の心得を錄せり。其の言ふ所、委曲周匝なりと雖も、良基の『菟玖波問答』に比ぶれば、稍末に流れて法に拘る弊あり。宗祇の連歌は、其の長短の句各々獨立の意味を爲しつゝ、前後相連接するを常とす。其の着想意

表に出で、前後長短句の關係推移・發展の妙云ふべからざるものあり。措辭も亦輕妙、絶えて苦作の跡を見ず。宗祇はまた和歌を能くせり。東常縁に就きて古今傳授を許されし事は、既に記載したるが如し。文龜二年七月三十日、齡八十三にて歿しぬ。其の著に、『新菟玖波集』あり。良基の『菟玖波集』に倣ひて、其の以後の連歌を集めたるものなり。なほ『自讚歌集』『愚句老葉』『初學抄』『老のすさみ』『山口記』『白髮集』『豆爾葉大概抄』等あり。

宗祇の教を受けしもの、中、柴屋軒宗長及び牡丹花肖柏の二人最も名高し。殊に、肖柏(一一〇二—一一八六)は、『新式今按』を著して、連歌に關する法則を追訂せり。然れども、此の頃より連歌は煩瑣なる法式あるものとなりて、漸く衰運を現すに至りぬ。是に於いて、本歌調の連歌に對して、一種變調のもの

の勃興せり。之を俳諧といふ。俳諧とは元來戲謔を主とせる歌の謂にして、古くは『萬葉集』にも出で、其の後世々の歌人中之を作るものありて、之を連歌に應用したるも、古來稀にはありき。然れども、一時に盛行するに至りしは、此の時を始とす。要するに、こゝに所謂俳諧は俳諧調の連歌の謂なり。此の變調の連歌を主唱して大名を博せる者を、荒木田守武(一一三三—一二二〇)及び山崎宗鑑(一一二五—一二二一)とす。共に永正・天文の頃の人にして、守武の著に『飛梅千句』、宗鑑の撰に『犬筑波集』あり。彼は優美にして雅致あり、是は粗豪にして卑野なる別あり。雖も滑稽諧謔を主とせるは一なり。さて又、此の頃より俳諧の前半即ち十七音を以て一首とする事始まりぬ。之を發句又俳句といふ。守武・宗鑑の二人亦之を能くせり。但し、其の流行・發達は次期即ち江戸時代の一

大現象とす。

連歌

宗 祇 法師

なべて世の 風ををさめよ 神の春  
 花もたひけの ゆふかくるころ  
 旅立てば かすむ山にも みちありて  
 かりねのそらに 近きわけがた  
 たが里の かねかどばかり きこゆらん  
 霜にふけゆく 月のさやけさ  
 枯野にも なほかげたのむ 虫の聲  
 一むらすき ちりなつくしそ  
 秋風や わがそでにのみ やどらまし  
 なにさかこねん 山ふかきみち  
 はるかなる 高嶺を見れば 雲の居て  
 うらわの波の 立ちかはるおと

宗

鑑

あつたら密柑 くさらかしぬる  
 正月の 茶の子にことを かさばかり

荒木田守武

花よりも 鼻にありける 匂ひかな  
 月はおぼろに ふくるおのしし

第四節 謡曲 附狂言

室町時代の初期には、田樂・猿樂の二樂共に世上に行はれ、稍下りては猿樂のみひこり榮えたり。應永の頃、大和に結崎次郎清次といふものありて、猿樂の巧者なりしかば、足利義滿之を寵し、同朋となして觀阿彌と呼ばひき。其の子左衛門大夫元清、世阿彌と稱し、亦此の技に達せしかば、子孫終に觀世の名を唱ふるに至りぬ。此の父子、從來の猿樂の能に田樂・曲舞・今様等種々の歌曲を折衷し、古作を改竄し、新曲を創作して、

遂に謠曲を興したり。かくて、足利義政の頃には、節調大に整ひ、世上の流行一層其の度を高め、遂に將軍家の式樂となりぬ。其の流派に觀世・金春・寶生・金剛の四座ありて、各妙技を競へり。此に至りて、謠曲は初の如く、音に神祇の功德を讚する所謂神事能のみにあらずなりて、人世の復雜なる現象を寫せるもありき。其の新曲の多く出でしも、亦此の頃を以て最とし、前後併せて三百番に及びたりといふ。

さて、是等の謠曲は、諸書に元清・信光等の作と記したれど、其は實際甚だ稀なることにして、多くは單に其の節譜舞容を一定したるまでなり。之を思想若しくは文詞に就きて稽ふるに、大抵僧侶の手に成れりとおぼしく、一休・正徹・宥快等正しく其の中にありと傳へたり。

謠曲の趣向は、神徳を稱するものを除き、或は巷談・俗説を基

とし、或は歴史・物語・戰記中の一事件若しくは一人物を骨子として、盛衰流轉の理を示さむとするものなり。されば、諸種の謠曲に通ずる一大思潮は、一に佛教的思想の以外に出づることなし。其の趣向の往々にして千篇一律に傾く弊の見ゆるも、畢竟此の一種の感想を素として結構したるに依るなるべし。

謠曲の文章は、幾百篇皆一概に論ずべからず。雖も、幽玄・悽愴なるもの、其の常にして、時に優麗・崇高・勇壯なるものなきにあらず。縁語の用法稍杜撰なるは厭ふべし。雖も、能く莊重なる漢文調と典雅ある國文調との二要素に、梵語をさへ混用して、文勢の變化曲折を自在にせり。就中、叙景の文と道行の文とは最も優美なり。但し、是等は、概ね從來の文學書に見えたる成語成句を其のまゝに轉用して、巧に綴合したる



ものこす。一篇の中には、語るべき部分と謠ふべき部分とありて、語るべきは大抵當時の通用語を以てし、謠ふべきは大方七五の調を用ゐたり。

當時、猿樂の能の眞面目なるに反し、専ら痴態を裝うて滑稽諷刺の趣を演ずる樂劇ありき。之を狂言と稱す。蓋し、是れ古來の猿樂なる語の本義に合へるものながら、該名稱の移りて能樂に附せらるゝに及びて、却りて彼を主とし我を従とするに至りぬ。其の脚色は極めて簡單なれども、往々人間の弱點を衝きて、揶揄戲弄の妙を極むるものあり。狂言の文章は、當時の口語を其のまゝに寫せるもの、自然に任せて矯飾せざる中に一種の風致を具ふ。此は、謠曲と異なりて、謠曲分甚だ少く、或は全く無きもあり。曲數は二百餘篇に達せり。云ふ。但し、今世に傳はれる『狂言記』は江戸時代の初葉に於

いて増減を施し、文章をも多少改刪したる者なりといふ。

高砂(謠曲)

ワキ次第「今をはじめの旅衣、日もゆくすゑぞ久しき。圓、そももこれは、九州肥後の國阿蘇の宮の神主友成とは我が事なり。己れいまだ都を見ず候ふ程に、此度思立ち都に上り候ふ。又よき次でなれば、播州高砂の浦をも一見せばやと存じ候ふ。道行旅衣、すゑはるゝの都路を、けふ思立つ浦の波舟路のどけき春風も、いく日來ぬらん跡末も、いさ白雲のはるゝと、さしも思ひし播磨洞、高砂の浦に着きにけり。シテ、ツレ一聲「高砂の、松の春風吹き暮れて、尾上の鐘も響くなり。ツ」波は霞の磯がくれ、二人「音こそしほの、満干なれ。シテサシ「誰れをかも知る人にせん高砂の、松も昔の友ならで、過ぎ來し世は白雪の、積りくゝて老の鶴の、時に残る有明の春の霜夜のおき居にも、松風をのみ聞き馴れて、心を友と昔遊の、思ひを述ぶるばかりなり。二人歌「おとづれば松に事問ふ浦風の、落葉衣の袖はへて、木蔭の塵を搔かうよ。處は高砂の、尾上の松も年ふりて、老の波もよりくるや、木の下蔭の落葉かく、なるまで命ながらへて、猶いつまでか生の松、それも久しき名所かな。ワキ圓里人を相

待つところに、老人夫婦來れり。いかに是れなる老人に尋ぬべき事の候ふ。  
 シテ聞「こなたの事にて候ふか。何事にて候ふぞ。ヨキ聞高砂の松とはいづれの  
 木を申し候ふぞ。シテ聞只今木蔭を清め候ふこそ、高砂の松にて候へ。ヨキ高  
 砂住の江の松に相生の名あり。當所と住吉とは國を隔てたるに、何とて相  
 生の松とは申し候ふぞ。シテ仰せの如く古今の序に、高砂住の江の松も相  
 生のやうに覺ねどあり。さりながら、此の尉は、津の國住吉のもの、是れなる  
 姥こそ當所の人なれ。知る事あれば申させ給へ。ヨキふしぎや見れば老人  
 の夫婦一所にありながら、遠き住の江、高砂の浦山國を隔て、住むと云ふ  
 は如何なる事やらん。シテうたての仰せ候ふや。山川万里を隔つれど、互に  
 通ふ心づかひの、妹背の道は遠からず。シテ案じても御覽せよ。ソレシテ高砂  
 住の江の松は、非情のものだにも、相生の名はあるぞかし。まして生ある人  
 として、年久しくも住吉より、通ひ馴れたる尉と姥は、松もろともに此の年  
 まで、相生の夫婦となるものを。ツツいはれをさけばおもしろや。さて、  
 さきに聞ねつる、相生の松の物語を、所にいひおくいはれはなきか。シテ昔  
 の人の申し、は、是れはめでたき世のためしなり。ツツ高砂といふは上代

の、萬葉集のいにしへのぎ。シテ住吉と申すは、いま此の御代に住み給ふ、延  
 喜の御事。ツツ松とは、盡きぬ言の葉の、シテ榮ねは古今相おなじと、シテツレ  
 「御代をわがむるたどへなり。ヨキよく、さけばありがたや、今こそ不審  
 春の日の、シテ光やはらぐ西の海の、ヨキかしては住の江、シテこゝは高砂。  
 ヲキ松も色そひ、シテ春も、ヨキのどかに、地、四海波靜にして、國も治まる時  
 つ風、枝を鳴らさぬ御代なれや、あひに相生の、松こそめでたかりけれ、げに  
 や仰ぎても、言もおろかや、斯かる世に住める民とて、ゆたかなる君のめぐ  
 みぞありがたき。  
 ヲキ聞「なほ、高砂の松のめでたきいはれ、委しく御物語り候へ。地、ツツそれ  
 草木心なしとは申せども、花實の時を違へず、陽春の徳を具へて、南枝花は  
 じめて開く。シテ然れども、此の松はそのけしきとこしなへにして、花葉  
 時を分かず。地、四つの時至りても、一千年のいる雪の中に深く、又は松花の  
 いろ十かへりとも云へり。シテかゝるたよりを松が枝の、地、言の葉草の露  
 の玉、心をみかく種となりて、シテ生さとし生けるもの毎に、地、敷島のかげ  
 によるとかや、ツツ然るに、長能が言葉にも、有情非情のその聲、みな歌にも

るゝことなし。草木土砂風聲水音まで萬物のこもる心より、春の林の東風に動き、秋の虫の北露に鳴くも、皆和歌の姿ならずや。中にも此の松は、萬木にすぐれて、十八公のよそはひ、千秋の緑をなして、古今の色を見ず。始皇の御爵に、わづかる程の木なりとて、異國にも本朝にも、萬民これを賞翫す。シテ「高砂の尾上の鐘の音すなり。地、曉かけて霜はおけども、松が枝の葉色はおなじ深みどり、立寄る陰の朝夕に、かけども落葉の盡きせぬは、まことなり。松の葉の散りうせずして色は尙ほ、正木のかつら長き世のたどへなりける常盤木の中にも名は高砂の、末代のためしにも、相生の松ぞめでたき。ロンギ地」げに名を得たる松が枝の、老木の昔あらはして、其の名を名のり給へや。シテ、ツレ「今は何をかつゝむべき。是れは高砂住の江の、相生の松の精。地」夫婦と現に來りたり。地、不思議やさては名どころの、松の奇特をあらはして、シテ、ツレ「草木心なけれども、地、かしこき世とて、シテ、ツレ「草も木も、地、わが大君の國なれば、いつまでも君が代に、住吉にまづ行きて、われにて待ち申さんど、夕波のみぎはなる、海人の小舟に打乗りて、追風にまかせつゝ、沖の方に出でにけりや、沖の方に出でにけり。マキ、高砂や、此の浦舟に帆をあげて、月

もろともに出でしはの、波の淡路の島かけや、遠くなるをの沖すぎて、はや住の江に着きにけり。後シテ「われ見ても久しくなりぬ住吉の、岸の姫松いよく、経ぬらん。睦まじと君は知らずや、瑞籬の、久しき世々の神かぐら、夜の鼓の拍子を揃へて、ずいしめ給へ、宮つこたち。地、西の海、あをきがはらの波間より、シテ「あらはれ出でし神松の、春なれやの、こんの雪の朝香がた。地、玉藻とるなる岸蔭の、シテ「松根によつて腰をすれば、地、千年の緑手に満てり。シテ「梅花を折つて頭にさせば、地、二月の雪ころもに落つ。

ロンギ地「ありがたの影向や、月すみよしの神遊、御影を拜むあらたさよ。シテ「げにさま、の舞姫の、聲もすむなり、住の江の、松影もうつるなる、青海波とはこれやらん。地、神と君との道すぐに、都の春にゆくべくは、シテ「それを還城樂の舞。地、さて萬歳の、マテ「小忌衣。地、さすかひなには悪魔を拂ひ、をさむる手には福壽をいだき、千秋樂は民を撫で、萬歳樂には命を延ぶ。相生の松風、颯々の聲ぞたのしむ。

柿山ふし (狂言)  
山ふし「大みねかつらさふみわけて、我が本山にかへらん。罷り出でたるは、大

峯葛城參詣いたし、唯今下向道で御さる。よきついでなれば、だんなまはり  
をいたさうとぞんずる。まづくそろく參らう。やれさて、なにとやら物  
はしうぞんずるが、まださきの在所はほゞ遠さうに御さる。なにといたさ  
うぞいゑ、こゝに見事な柿が御さるほゞに、一つとつてたべうとぞんずる。  
「かきぬし」罷り出でたるは、此あたりの者で御さる。今日もいて、又柿を見舞は  
うとぞんずる。なにといたしてやら、鳥がついて迷惑いたす。いゑ、こゝな鳥  
がくうかして、帯がおちたが、わゝ、さねもおつるが、うへに鳥がをるか。いゑ、  
山伏があがつてをるか、何といたさうぞいゑ、さやつをなぶりませうぞ。は  
あ、上に猿めがあがつてをる。山ぶし「はあ、柿ぬしめが見つけをつた。なにと  
いたさうぞ。かきぬし」はあ、あれは猿ぢやが、身せゝりをせう事ぢやが、身せゝり  
せぬ。いな事ぢや。山ぶし「わ、それがしを猿ぢやといふが、はあこりや身せゝり  
しませうぞ。かきぬし」ふん、さるにまがう所はない。猿ならなかうぞ。山ぶし「は  
あ、こりやなかさなるまい。さやく。かきぬし」はあ、猿にまがふ所はない。猿か  
とおもへば、犬ぢやげなわい。いゑ、山ぶし「はあ、又こりや犬ぢやといふ。かきぬし  
「犬ならなかうぞ。山ぶし」はあ、またこりやなかさなるまい。びよく。かきぬし

「はあ、犬ぢやく。犬かとおもへば、猿ぢやげなわい。いゑ、山ぶし「はあ、こりや又  
猿ぢやといふ。かきぬし」猿ならなかうぞ。山ぶし「とばさなるまい。かきぬし」猿ならな  
げやよく。ありやとんだは。山ぶし「わいた。いゑ、そこな者。それがし  
が木のそらにゐれば、たつとい山伏を、いや犬で候の、さるで候のというて、  
なせに腰をぬかしたぞ。いそいでくすろうてかやせ。かきぬし」いゑ、そこな者。柿  
をくて、恥しくば、御免なれというて、おつとせでいね。山ぶし「いゑ、そこな者。山  
伏のてがらには、目に物を見せうぞ。かきぬし」柿盗みながら、小言をいはす  
とも、いそいでいね。山ぶし「ぢやういふか。物にくるはせうが。かきぬし」山伏おけ。な  
るまいぞ。山ぶし「ぢやういふか。それ山伏といつば、役の行者のあとをつぎ、難  
行、苦行、苦の行をする。今此行力かなはぬかどて、一祈りずいのかつたる。山ぶし  
「橋の下の菖蒲は、たが植ゑた菖蒲ぞ。かきぬし」いゑ、山伏。おかしい事せずとも  
いね。山ぶし「いゑ、ぢやういふか。今ひと祈りずいのかつたる。ぼうるぼん。ぼうる  
ぼん。ぼうるぼん。そりやみたか。山伏のてがらには、物にくるふはてがらで  
はないか。

## 第參章 散文

## 第壹節 總說

室町時代の散文は、其の大體の性質に就きていへば、鎌倉時代のものゝ大同小異にして、即ち貫流せる思潮も佛教的臭味を帶び、文章も亦和漢混交の體なり。但し、本期の特色は、まゝ文姿の稍華に過ぎたるものもあるも、一般には質實平板なる風の増加せること、前時代に流行せし繪卷物の發達して御伽草子となれることあり。尙ほひろく著述界に就きて言へば、本期の初に北畠親房あり、中ごろ今川貞世(了俊)あり、末に一條兼良あり、皆博學にして見識時輩に卓越し、述作する所甚だ多し。雖も、概ね典制考證等の實用を主とせるものなり。此の外、伊勢氏・小笠原氏等の武家故實に關する書、頻々として出でたれど、其の文學に關係なきは言ふまでもなし。

予輩は爰に文學上重要なものゝみを舉げて、隨筆・雜史(附戰記文)・御伽草子の三項に分たむことす。貞世・兼良及び北條氏康等の作中數種は、多少文學的價値を具ふるものあり。雖も、大方は古文を模擬せるものにて、而も取出して評すべきふしなし。

## 第貳節 隨筆

此の時代に隨筆の名を冠せしむべきものは、只『徒然草』の一部あるのみ。其の著者を僧兼好とす。

兼好法師(一九四三—二〇一〇)は、姓を卜部といひ、治部少輔兼顯の第三子なり。其の家代々神道を以て官に仕へしかば、兼好も自ら其の教育を受けて斯道に通ぜしはいふに及ばず、有職故實の道及び儒學老佛の學、我が朝の古文和歌等に

も明かありき。始め吉田といふ處に住して、吉田兼好と呼びぬ。伏見後伏見天皇の御宇に禁中の瀧口に參り、後二條花園天皇の朝に六位藏人となり、左兵衛尉に任ぜられ、三十七歳の頃後宇多院の仙洞に奉仕して北面に伺候せしが、感ずることありて程なく出家し、俗名のまゝを音讀して、兼好法師とは唱へき。それより諸國を歴遊して、只管風月に情懷を漏しぬ。然れども、大方は仁和寺の邊なる雙が岡又は伊賀の密乗院に住せり。正平五年(北朝觀應元年)佛滅日、年六十八にて寂しぬ。

其の著『徒然草』は、何くれこあく心に感ぜし事ごもを記しおけるもの、草庵の壁に貼られて残りしを、兼好の歿後に編成したるものなりといふ。故に、此の書は始終の連絡一貫せず、されどなる文長短すべて二百四十餘篇より成れ

り。記する所は、大方佛説に基き、又は老莊の説を參酌したるもの多し。その他、儒學の教義を記せる、或は公事有職の道を叙べたる、或は和歌を論じ、或は男女の性情を説くなど、讀み來れば、時に森嚴襟を正さしめ、時に妖艶魂を奪ひ、又は眞摯激切肝膽を穿ち、滑稽洒落頤を解かしむる概あり。文章は、『源氏』『枕草子』などの優美なるを採り、之に『文選』『白氏文集』又は老莊、浮屠の語などを交へたり。

兼好は、又和歌にも巧にして、其の頃頓阿等と共に和歌の四天王と稱せられき。其の歌集の後世に傳はるものを『兼好法師家集』といへり。

萬事は皆非なり『徒然草』

名利につかはれてしづかなるいとまなく、一生を苦しむるこそおろかなれ。寶多ければ身を守るにまどし。善を買ひわづらひをまねく媒なり。身の後には金をして北斗をさふども、人のためにすわづらはるべき。愚なる

人の目をよるこばしむるたのしみ、又あぢきなし。大なる車肥れたる馬、金玉のかざりも心あらん人は、うたておろかなりと予見るべき。金は山にすて、玉は淵になぐべし。利にまどふはすぐれて恐なる人なり。うづもれぬ名をながき世に残さんこそ、あらまほしかるべけれ。位高くやんごとなきをしも、すぐれたる人とやはいふべき。恐につたなき人も、家に生れ時にあへば、高き位にのぼり、ををりを極むるもあり、いみじかりし賢人、聖人、みづから賤しき位にをり、時にあはずしてやみぬるも亦多し。ひとへに高き位つかさをのぞむも、次におろかなり。智慧と心こそ世にすぐれたるはまれも、残さまほしきを、つらく思へば、はまれを愛するは人のきくを喜ぶなり。ほむる人、そしる人共に世にとまらず、傳へさかん人またく速に去るべし。誰をかはず、誰にか知らんことをねがはん、はまれは又そしりのもととなり。身の後の名のこりて、更に益なし。これをねがふは、次に恐なり。但し、強ひて智を求め、賢をねがふ人のために、いはゞ、智慧出で、は偽あり、才能は煩惱の増長せるなり。傳へてきく、學びてしるは、まことの智にあらず。如何なるをか智と云ふべき。不可は一條なり。いかなるとか善といふま

ことの人、は、智もなく、徳もなく、功もなく、名もなし。たれか知り、たれか傳へん。是れ徳をかくし、恐をまもるにあらず、もとより賢愚得失の境に居らざればなり。迷の心を持ちて、名利の要を求むるに、かくの如し。萬事は皆非なり、いふに足らず、ねがふにたらず。

### 第參節 雜史 附戰記文

爰に雜史として録すべきは、『神皇正統記』と『増鏡』との二書なり。『太平記』は古來久しく實録として傳へられたれど、輓近の研究は之を以て一部の戰記とするに至りぬ。

『神皇正統記』は、源親房の著なり。親房(一九五三—二〇一四)は、權大納言師重の子にて、家を北畠或は中院と稱せり。花園天皇の延慶の頃、從四位下、右近衛中將に任ぜられ、諸官を経て、後村上天皇の正平六年に三宮に准ぜられ、輦車宮に入る

とを許されたり。常に兵馬倥傯の間において、南朝の社稷を恢復せむと謀り、造次顛沛にも盡忠の念厚かりしは、世の熟知する所あり。其の薨去ありしは正平九年四月十七日に、て、享年六十二なりき。

此の『神皇正統記』は、後村上天皇の興國中の作にて、當時皇統兩立して正潤の分忘られしを、憤慨せる餘に出でしものなり。上は神代より、下は興國の初に至るまでの歴史を叙し、我が國牀の他邦に異なる所以を説き、神器の承傳、現在を明かにし、以て南朝の正統たるべきことを解示せり。其の間往々佛神の利驗、天道の順環を述べ、史論としては物足らぬ心地する所なきにあらずと雖も、公明端嚴の筆致、能く人をして首肯せしむるものあり。著者が忠誠の氣作中に充溢して、轉其の人の性行を想像せしむる趣あるは、此の書の特徴と

も謂ひつべし。

親房の著書は、『正統記』の外に、『職原抄』『元々集』『二十一社記』『古今集註』等あり。世の人、其の學殖を稱へ、當代の博識家藤原宣房及び源定房と併せて、後の三房といへりきとぞ。『増鏡』は舊說に一條兼良の子冬良の作なりといひ傳へたれど、審かならず。此の書、後鳥羽天皇の御時より後醍醐天皇の元弘三年隱岐より還幸ありし程までの事を載せたれば、蓋し建武中興より程遠からぬ時代に出來しものあるべし。すべての體裁は、『大鏡』『今鏡』等を折衷し、全篇を十七條に分ちて、雅名を附したり。世人之を『水鏡』『大鏡』の二書に併せて三鏡といひ、史學上の重寶とす。若し此の三鏡に、『今鏡』を加へて四篇を通覽せば、神武天皇より後醍醐天皇の御宇に至る歴代の事蹟を徵するを得べし。『増鏡』の文章は、又『大鏡』



『今鏡』等に似て優美なるものから、事件によりては莊重雄麗のところなきにあらず。

『大平記』四十卷は、花園天皇の文保二年より後村上天皇の正平二十二年にかけて、およそ五十年間に於ける事蹟、即ち南北朝の分裂、諸處の戦況、忠臣烈士の物語等を記載したるものなり。其の作者は立惠法師なり。この舊説あれど、今は小島法師といへる綺語家なる由に定まりぬ。但し、小島法師の閱歴なほ詳かならず。此の書の體裁は、全く『源平盛衰記』『平家物語』に横し、文章は一層華麗に過ぎたり。全體の記事は、虚實相混じられたれば、皆がら史上の事實として見るべきものにあらず。一部を貫流せる思潮は、『盛衰記』『平家』の如く佛教的思想にして、尙ほ彼等に見えたるものより亢上せるが如し。此の『大平記』の記事を妄なりとして辨難せるを『梅松論』

とす。著者また詳かならず。言を巷談に托して、元弘の頃より足利氏謀反の顛末を叙べたり。事實は正確なれども、文章は『大平記』に劣れり。別に、今川貞世の著述に『難太平記』といふも、題名の如く本書を實録と認めて、其の謬妄を正したるものなり。

廢帝(仲恭天皇)の條 『神皇正統記』

廢帝、諱は懷成、順德の太子、御母は東一條院藤原光子、故攝政太政大臣良經の女なり。承久三年春の頃より上皇思召し立つ事ありければ、俄に讓國し給ふ。順德御身を輕めて、合戦の事をもひとつ御心にせさせ給はん御謀にや。新主に讓位ありしかど、即位登壇までもなくて軍破れしかば、外舅攝政道家の大臣の亭へ遁れさせ給ふ。三種の神器をば關院の内裏に捨ておかれにき。讓位の後七十七ヶ日の間、暫く神器を傳へ給ひしかども、日嗣には加へ奉らず。飯豐の天皇の例になぞらへ申すべきにこそ、元服などもなくて、十七歳にてかくれまします。扱も、其の世のみだれを思ふに、誠に末の世

には迷ふ心もありぬべく、又下の上を凌ぐ端ともなりぬべし。そのいはれをよく辨へらるべき事に侍り、頼朝勳功は昔より類なき程なれど、偏に天下を掌にせしかば、君として安からず思召しけるも理なり。況や其の跡絶えて、後室の尼公陪臣の義時の世になりぬれば、彼の跡を削りて御心のままにせらるべしといふも、一應のいひなきにあらざる。然れども、白河鳥羽の御代の頃より、政道の古き姿やうく衰へ、後白河の御時兵革起りて、姦臣世を亂り、天下の民殆ど塗炭に落ちにき。頼朝一臂を振ひて、其の亂を平げたり。王室は古きにかへるまでなかりしかど、九重の塵もをさまり、萬民の肩もやすまりぬ。上下堵をやすくし、東より西より其の徳に服せしかば、實朝なくなりても、叛く者ありとは聞えず。これにまさる程の徳政なくして、いかでたやすく覆さるべき。たとひ又失はるべくとも、民やすかるまじくば、上天よくみし給はじ。次に王者の軍といふは、科あるを討じて、疵なきをば亡さず。頼朝高官に昇り、守護の職を給ふ。これ皆法皇の勅裁なり。私に盗めりとは定めがたし。後室其の跡を計ひ、義時久しく彼れが權をとりて人の背かざりしかば、下には疵だ末ありといふべからず。一應のいはればか

りにて追討せられんは、上の御料とや申すべき。謀叛起したる朝敵の利を得たるは、比量せられがたし。かゝれば時の至らず天の許さぬことは疑なし。但し、下の上を剋するは極めたる非道なり。終にはなぞか皇化にまつるはざるべき。先づ賊の徳政を行はれ、朝威をたて、かれを剋するばかりの道ありて、其の上の事をと覺は侍る。且つは世の治亂の姿をも能く鑒みしらせ給ひて、私の御心なくば、干戈を動かさるゝか、弓矢を治めらるゝか、天の命に任せ、人の望に隨はせ給ふべかりし事にや。終にしては、繼體の道も正路に歸り、御子孫の世に一統の聖運を開かれぬれば、御本意の未だ達せぬにはあらず。されど、一旦もしつませ給ひしこそ口をしく侍れ。

『新島もりの一節』『増鏡』

いつの年よりも五月雨はれまなくて、富士川、天龍など、えもいはず漲りさわぎで、いかなる龍馬もうちわたしがたければ、攻めのぼる武者ども、あやしくなやめり。かゝれども、遂に都に近づくよしきこゆれば、君の御武者もいでたつ。其勢六萬餘騎とかや、宇治勢多へわかちつかはす。世の中ひさのゝしるさや、言の葉も及ばずまねびがたし。あるは深き山に逃げこも

り、遠き世界におちくだり、すべて安げなく騒ぎみちたり、いかゝあらむと、君(後鳥羽)も御心亂れておぼしまさふ。かねては猛く見えし人々も、まことのきはになりぬれば、いこゝ心おはたしく、色を失ひたるさまども、頼もしげなし。

六月十日あまりにや、いくばくの戦だになくて、遂に味方の軍破れぬ。荒磯に高沙などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いはむ方なくあきれて、上下只物にぞあたりまふ。あづまよりいひおこするまゝに、かの二人兼時、時房の大將軍はからひおきてつゝ、保元のためしにや、院の上都の外に遷し奉るべしと聞ゆれば、女院宮々所々におぼしまさふ。事さらなり。本院(後鳥羽)は隱岐の國におはしますべければ、まづ鳥羽殿へ網代車のあやしげなるにて、七月六日入らせ給ふ。今日をかぎりの御ありき、あさましうあはれなり。ものもがなやと思さるゝもかひなし。その日やがて御ぐしおろす。御年四十に一つ二つや餘らせ給ふらむ。まだいとはしかるべき御程なり。信實朝臣召して御姿うつし書かせらる。七條の院へ奉らせ給はむとなり。

かくて、おなじ十三日に御船にたてまつりて、遙なる浪路をしのぎおはします。御心ちこの世のおなじ御身どもおぼされず。いみじういかなりける代々の報いにかとうらめし。新院順徳も佐渡の國にうつらせ給ふ。まことや、七月九日御門(仲恭)をもおろし奉りき。この四月かどよ、御讓位とてめでたかりしに、夢のやうなり。七十餘日にており給へるためしも、これやはじめなるらむ。唐土にぞ四十五日とかや位におはする例ありけるとぞ。からのふみよみし人のいひし心ちする。それもかやうのみだれやありけむ。さて、上達都殿上人、それより下はた残るなく、この事にふれにしたぐひは、重く軽く罪にあたるさま、いみじげなり。中院(土御門)ははじめよりしろしめさぬ事なれば、あづまにもとがめ申さねど、父(後鳥羽)の院遙にうつらせ給ひぬるに、のどかにて都にてあらむ事、いとおそれありと思されて、御心もて、その年間十月十日土佐の國のはたといふ所に渡らせ給ひぬ。

俊基の東下『太平記』

俊基朝臣は、先年土岐十郎頼貞が討たれし後、召捕はれて鎌倉まで下り給ひしかども、様々に陳じ申されし趣げにもとて、赦免せられたりけるが、又

今度の白狀ともに専ら陰謀の企て彼の朝臣に在りと載せたりければ、七月十一日に又六波羅へ召捕はれて、關東へ送られ給ふ。再叛赦さるは法令の定むる所なれば、何と陳すとも許されし、路次にて失はるゝか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をば離れしと思ひ儲けて予出でられける。落花の雪に踏み迷ふ、片野の春の櫻狩り、紅葉の錦を着て歸る、嵐の山の秋の暮一夜をあかす程だにも、旅寝となれば物憂きに、恩愛の契り淺からぬ、我が故郷の妻子をば行くへも知らず思ひおき、年久しくも住みなれし、九重の帝都をば今をかぎりと願みて、思はぬ旅に出で給ふ、心の中ぞ哀れなる。憂きをば止めぬ逢坂の關の清水に袖濡れて、末は山路を打出の濱沖を遙に見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く、身を浮舟の浮沈み、駒もといろと踏みならす、勢多の長橋打渡り、行きかふ人に近江路や、世のうねの野に鳴く鶴も、子を思ふかど哀なり、時雨もいたくもる山の木の下露に袖濡れて、風に露ちる篠原や、篠分くる道を過ぎ行けば、鏡の山はありとても、泪に曇りて見ぬわが物、物と思へば夜の間にも、おひその森の下草に、駒を留めて願る、古郷を雲や隔つらん、番馬塵が井柏原、不破の關屋は荒れはて、なほもるも

のは秋の雨の、いつか我が身の尾張なる、熱田の八劍伏し拜み、鹽干に今や鳴海海、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいつくと遠江、濱名の橋の夕鹽に、引く人もなき捨小舟、沈み果てぬる身にしあれば、誰れか哀れと夕暮の、晚鐘鳴れば、今とはとて、池田の宿に着き給ふ、元暦元年の比か、とよ、重衡の中將の東夷のために囚はれて、此宿に着き給ひしに、  
あづま路の 植生の小屋の いふせきに 故里いかに 戀しかるらん  
と長者の娘が詠みたりし、其の古の哀れまでも、思ひ残さぬ泪なり、旅館の燈火幽かにして、鶏鳴曉を催せば、匹馬風に嘶へては、天龍川を打渡り、小夜の中山越え行けば、白雲路を埋み來て、そことも知らぬ夕暮に、家郷の空を望みても、昔西行法師が、命なりけりと詠じつゝ、二たび越えし跡までも、美しくぞ思はれける、隙行く駒の足はやみ、日既に亭午に昇れば、餉參らす程とて、輿を庭前に昇きとせむ、鞍を叩いて、警固の武士を近付け、宿の名を問ひ給ふに、菊川と申すなりと答へければ、承久の合戦の時、院宣書きたりし答によつて、光親卿關東へ召下されしが、此の宿にて誅せられし時、  
昔南陽縣菊水 汲下流而延齡 今東海道菊河 宿西岸而終命

と誓きたりし、遠き昔の筆の跡今は我が身の上に成り、哀れやいと増さ  
りけん、一首の歌を詠みて、宿の柱にぞ書かれける。

いにしへも かゝるためしを きく川の 同じながれに 身をや沈めん  
大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐の山の花  
盛り、龍頭鷁首の舟に乗り、詩歌管弦の宴に侍りし事も、今は二度見ぬ夜の  
夢と成りぬと、思ひつゞけ給ふ、島田藤枝にかゝりて、岡部の眞葛裏枯れて、  
物悲しき夕暮に、宇都の山邊を越え行けば、葛根いと茂りて道もなし、昔業  
平の中將の、住所を求むとて、東の方に下るとて、夢にも人に逢はぬなりけ  
りと詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり、清見瀨を過ぎ給へば、都に還  
る夢をさへ、返さぬ浪の關守に、いと涙を催され、向ひは、いづこ三穂が崎、  
沖津浦原打過ぎて、富士の高根を見給へば、雪の中より立つけふり、上なき  
思に比べつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎ行けば、鹽干や淺き船  
浮けて、おりたつ田子のみづからも、うき世を遠る車返し、竹の下道行きな  
やむ、足柄山の峠より、大磯小磯見下して、袖にも浪はこゆるぎの、急ぐとし  
もはなれども、日數つもれば、七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ著き給

ひけれ

#### 第四節 御伽草子

鎌倉時代の初より流行せし繪巻物は、本期に至りて愈發達  
し、從來繪畫をのみ主とせしもの、今は詞書の上にも多少留  
意することゝなりぬ。之を御伽草子と呼びて、當時中流以上  
の社會にもてはやされたること、殆ど往昔の物語にも譲ら  
ざる程なりき。其の作の今日に傳はるもの、『浦島太郎』『文正  
草子』『鉢かつぎ』等二十餘種あり。然れども、是等の草子は、其  
の主とするところ元來繪畫にありしを以て、畫工ならざる  
詞書の作者は、其の名を逸したるもの多し。各篇の材料并に  
趣向は、率ね古傳説または古物語より採りて、増補改削した  
るものなり。文章も、亦古物語の格法を模し、之に足利時代の

特製にかゝる杜撰粗漏なる漢語及び俗語を混用せるものにて、波瀾抑揚の技巧あるをなし。御伽草子著作の目的は、上流社會の慰に供すること共に、教訓をも兼ねたり。其の教訓の主義は、寓意の中に神明佛陀の靈驗功德を説きて、讀者の道義心を養ふにありしが如し。今日に傳はれる御伽草子の中には、徳川氏の初に至りて出でしものもあり。

御伽草子の外、また此の時代に古躰を模倣せる物語ありき。一條兼良の『鴉鷲合戦物語』、作者未詳の『魚類合戦物語』、『常磐姫物語』、『鳥部山物語』、『松帆浦物語』等是れなり。然れども、是等は文章も趣向も生面を出せるものにあらず。

『鉢かつぎ』の一節『御伽草子』

中將殿は御覽じて、鉢かつぎはいづくへぞとの給へば、いづくとしもさして行くべき方もなし、母にはなれて、けつくかゝるかたわさへつき候へば、みる人ぞにおぢおそれにくがる人は候へども、おはれむ人はなしと申

しければ、中將殿さこしめして、人のもとにはふしぎなる物のあるもよきものにて候とのたまへば、おはせに従ひておかれける。さて身の能は何ぞとの給ひければ、なにと申すべきやうもなし、母にかしづかれし時は、琴琵琶和琴笙篳りき古今萬葉伊勢物語法華經八卷かすの御經をもよみしよりほかの能もなし。さては能もなくば湯殿におけとありければ、いまだならはぬことなれど、時にしたがふ世のなかなれば、湯殿の火をこそたかれけれ。わけぬれば見る人わらひなふりにくがる人おほけれども、なさをかくる人はなし。わけくれ御行水よはちかつぎとて、三更四更もすぎざるに、五更の天もわけざるに、せめおこされていたはしや、ふしなれぬしのだけのおのれと雪に埋もれて、ふしたふれたる風情して、ものはかなげにをさなごが、思ひをしばのゆふけふり、たつ名をもくるしと打ちながめ、行水はわきまいらせ候は、やとり給へと催促する。くるれば、御足の湯わかせや、はちかつぎと下知をする。うき身ながらも、おきあがり、みだれたる柴をひきよせながら、かくぞつらね給ひける。

苦しきは、をりたく柴の、夕けふり、うき身とともに、たちやさまし



ど、かやうにうちながめ、いかなる因果のむくいにか、かゝるうき世にすみ  
 そめて、いつまでいのちながらへ、かほせにものをおもひねの、むかしを思  
 ひいでのさと、胸はするがのふじのだけ、袖は清見が關なれや、いつまでい  
 のちながらへて、うきにはたえぬなみだ河ながれて、すゑもたのまれず、さ  
 くのうちらばにおく露の、何となりゆく此身、ひとりとくどきてかくばか  
 り、

松風の そらふきはらふ よにいで、 さやけき月を いつかながめん  
 かやうに詠じ、足の湯を分わかしける、

## 第六編 江戸時代の文學

## 第一章 總論

江戸時代の文學とは、慶長八年徳川家康幕府を江戸に創設せし頃より、慶應三年徳川慶喜公將軍職を奉還して王政復古の時に至る、二百六十餘年間の文學をいふ。

本期の文學は、最初京都より起りたるものあり、雖も、大抵大阪の地を中心として發生し、而して後江戸に移りしものありき。かくの如くして、從來我が國の文學は、概ね平安城裡の貴族にのみ限られしも、今や幕府の所在地を聚散の市場として、僻遠なる九州奥羽にも及び、而も各種の社會悉く之を有するに至れり。加之、本期の文學の特殊なるは、其の種類多なる前古無比なりしとなり。先づ、漢學は、徳川家康の



の活眼經世治民の法の主として儒學に存するを知り、大に之が獎勵を務めしかば、最も早く興起せり。次に國學は、寧ろ草莽の間より起りて異常の發達を爲し、積年亂離の間に紊亂極りなかりし語格を、漸く反正せられたり。其の他、俳諧の如き、小説の如き、又淨瑠璃の如き、前代の末葉に於いては、其の萌芽の僅に見るべかりしものも、此の時代に入りてみな大成せり。特に貞享・元祿の前後、稀世の文豪一時に出て、各種の文學各其の隆昌を競へり。元祿以後に至りても、漢學と國學とは、なほ大家名匠相繼ぎたりしが、小説は一頓挫を來し、淨瑠璃はた昔日の如くならざりき。漢學は、訓詁を離れて眼を國家の經營に注ぐもあり。或は平易なる邦文をものして一般凡俗が智徳の養成を力むるもあり。蓋し皆先輩を祖述して守成の功を成す者なり。國學の進歩に至りては、

殊に著目すべき點多く、或は古文辭の註解に従ふ者、或は律令・制典の研鑽を務とする者、或は神道・國史を究むる者、或は考證を專にする者等、各自の赴く所に任せて、多種多様に生面を開きたり。寛政・享和より文化・文政に亘れる四十年間は、當期文學第二の盛時とす。但し、之を元祿時代に比すれば、或は及ばざるものあきにあらず。淨瑠璃・俳諧の如き即ち是れなり。明和・安永の頃より、洋學の研究其の端緒を開きたり。雖も、未だ我が文學に著き影響を與ふるに至らざりき。此の時代の文學を貫通する理想は、主として儒教主義にして、小説・淨瑠璃の如きも、大抵勸善懲惡を主とする傾向あり。佛教に依れるものも、雖も、また因果應報の旨に副へて此の意を表せるが多し。但し、國學の興隆するにつれて、日本主義また行はれぬ。なほ、此の時代の文學は、一般に洋々泰平の氣

を帶び、其の極放逸淫靡の風を着けたるは、時世の然らしめしに因れり。

當期の始め、言語は室町時代の紛亂せるまゝを踏襲せり。其の後國學者力めて語格の匡正を謀りしが、是れ單に記載語の上にありしかば、到頭口語と文章との間に著き懸隔を見るに至れり。殊に國學者の物せる雅文は餘りに擬古に偏し、漢學者の作れる和漢混和文は自ら漢文直譯の氣を脱せず、兩つながら平俗の談話に遠ざかりぬ。獨り、此の間に立ちて最も能く和漢雅俗の言語を調和したるを、小説・淨瑠璃の文とす。實に是等の文學中には辭想共に江戸時代文學の精髓ともいふべきものあるを見るなり。

## 第二章 歌謡

### 第一節 總說

既に室町時代に連歌より一轉したる俳諧は、此の時代に入りて空前絶後の偉觀を呈し、又該期の特殊文學たりし謠曲と狂言とは、更に歩武を進めて淨瑠璃と演劇脚本との新裝を著けたり。和歌には、萬葉派及び桂園派と唱ふるもの相繼ぎて出で、前期に於いて陳腐に屬せし歌界に一大革新を與へ、殆ど奈良・平安の盛時に接する趣あり。又久しく廢れたりし長歌さへ此の時代に至りて勃興し、古來甚だ稀なりし狂歌といふもの亦盛に行はれたり。

俳諧及び淨瑠璃の最も盛なりしは、元祿の頃にして、萬葉派の和歌の榮えたるは其れより稍後なり。而して、脚本と狂言とは寶曆以後寛政の間に、桂園派の和歌は文化・文政の交に

於いて、いづれも隆盛を極めぬ。今此の時代の歌謡を叙述するに當りては、和歌・俳諧及び淨瑠璃の三大部に分ち、和歌の下に狂歌を、淨瑠璃の下に脚本を附記せむとす。

### 第貳節 和歌附狂歌

和歌は、當期の初に在りては、單に室町時代の餘風を承けて些少の變革進歩もなく、全く極衰の域に沈淪せり。蓋し、當時の歌人と呼ばれしものは、概ね彼の二條冷泉等の無用なる秘事口訣を墨守せる輩ありしのみ。其の頃細川幽齋藤孝、二一九二―二二七〇、木下長嘯子勝俊、二二三九―二三〇九といふは、共に其の身武人にして歌學に通曉せるものなりしが、殊に長嘯子は野に下りて只管斯道を翫びしかば、從來上流社會の專有ありし和歌をして、一般平民の物たらしむる

媒介を爲せり。さる程に、下河邊長流僧契冲等相續いで出て、堂上家の和歌が妄りに規則に拘泥して在野の歌人を容れざるを慨き、『萬葉』『古今』等の古歌を研究して歌界の革新を唱へたり。されば、其の詠おのづから二條冷泉等の師範家に出入する歌人の作と異なるものありき。享保・元文の頃、荷田春滿(二三三〇―二三九六)、加茂眞淵等輩出するに及びて、革新の事、其の成を告げ、和歌の姿情漸く古に復りて、歌界の弊風全く打破せられたり。

下河邊長流(二二八三―二三四五)はもと大和の人ありしが、中年より大阪の傍に住せり。國學を好み和歌を能くし、旁ら儒學にも通じたり。人となり強記にして、『萬葉集』『古今集』『伊勢物語』等の如きは、悉く之を暗誦せりといふ。徳川光圀其の名を傳へ聞き、幣を厚うして之を招きしかども、權貴に交

るを厭ひて應ぜざりき。光圀即ち紙筆を賜ひて『萬葉集』の註釋を乞ひけるに、意の向ふ時あらでは筆を採らざりしかば、業を果さずして歿せり。時に貞享三年、齡六十三。

僧契沖(二三〇〇—二三六一)は俗姓を下河といひ、父祖は攝津の尼崎侯に仕へたり。契沖、十一歳の時、今里の妙法寺に入り、十三歳の時髪を剃りて高野山に登り、學行具さに至りて、遂に兩部大阿闍梨の僧位を得たり。下山の後生玉の曼陀羅院に住せしが、幾も無く去りて諸方に行脚し、年や、高きに及びて大阪の高津に卜居し、庵を結びて圓珠庵といへり。浮屠氏の經典は其の職とする所にして最も精通せしが、別に國學の蘊奥を窮め、中古以後歌道の振はずあれるを嘆じ、遂に復古の説を唱導したり。此の時に當り、長流曩に光圀の命を奉じて『萬葉集』の註釋を作らむとせしに、成らずして歿

せしかば、契沖其の跡をつぐの命を蒙り、業を了へて上りぬ。

『萬葉代匠記』即ち是れなり。是に於いて、世人始めて『萬葉』の高調を窺ふことを得るに至れり。契沖また『古今餘材抄』を著して『古今集』を註し、『和字正濫抄』を作りて假名遣の亂れたるを正しき。其の他『勢語臆斷』『源註拾遺』『百人一首改觀抄』『厚顔抄』『河社』『漫吟集』等の著ありて、孰れも國文學講習の好資料たり。元祿十四年正月十五日、齡六十二にして寂せり。長流と契沖とは方外の友にして親交ありしかば、贈答の歌文あまたあり。

賀茂眞淵(二三五七—二四二九)は遠江の人なり。少壯の頃より讀書に耽りしが、三十七才にして京都に上り、春滿の門に遊びぬ。成業の後江戸に出て、古學の教授に従事せしが、其の業を受けしもの三百に餘れり。本居宣長、村田春海、橘千蔭、加

藤宇萬伎荒木田久老楫取魚彦等當時の有名なる國學者は、大抵其の門より出てたるなり。一たび田安中納言宗武に招聘せられしが、間もあく致仕して益心を國學の研鑽に用ゐたり。其の頃の住居は日本橋濱町にありしが、庭園を上代の田家の様に作りて、自ら縣居と呼べり。和歌の復興と古學の隆盛とは先進の主唱によれり。雖も、其の功を收めしは主として眞淵の力なり。故を以て世に之を稱して眞淵翁の前に眞淵翁なく、眞淵翁の後に眞淵翁なしと云へり。眞淵の和歌は能く萬葉の姿情を傳ふるどころありき。殊に短歌は、古歌に見えたる如き天真雄渾の美を復活して、まゝ人麿赤人の壘を磨する趣あり。然れども眞淵は單に歌人として論ずべきものにあらず。古學者としての功業は、其の歌學界に於けるものと軒輊する所あらざりき。文章の如きも

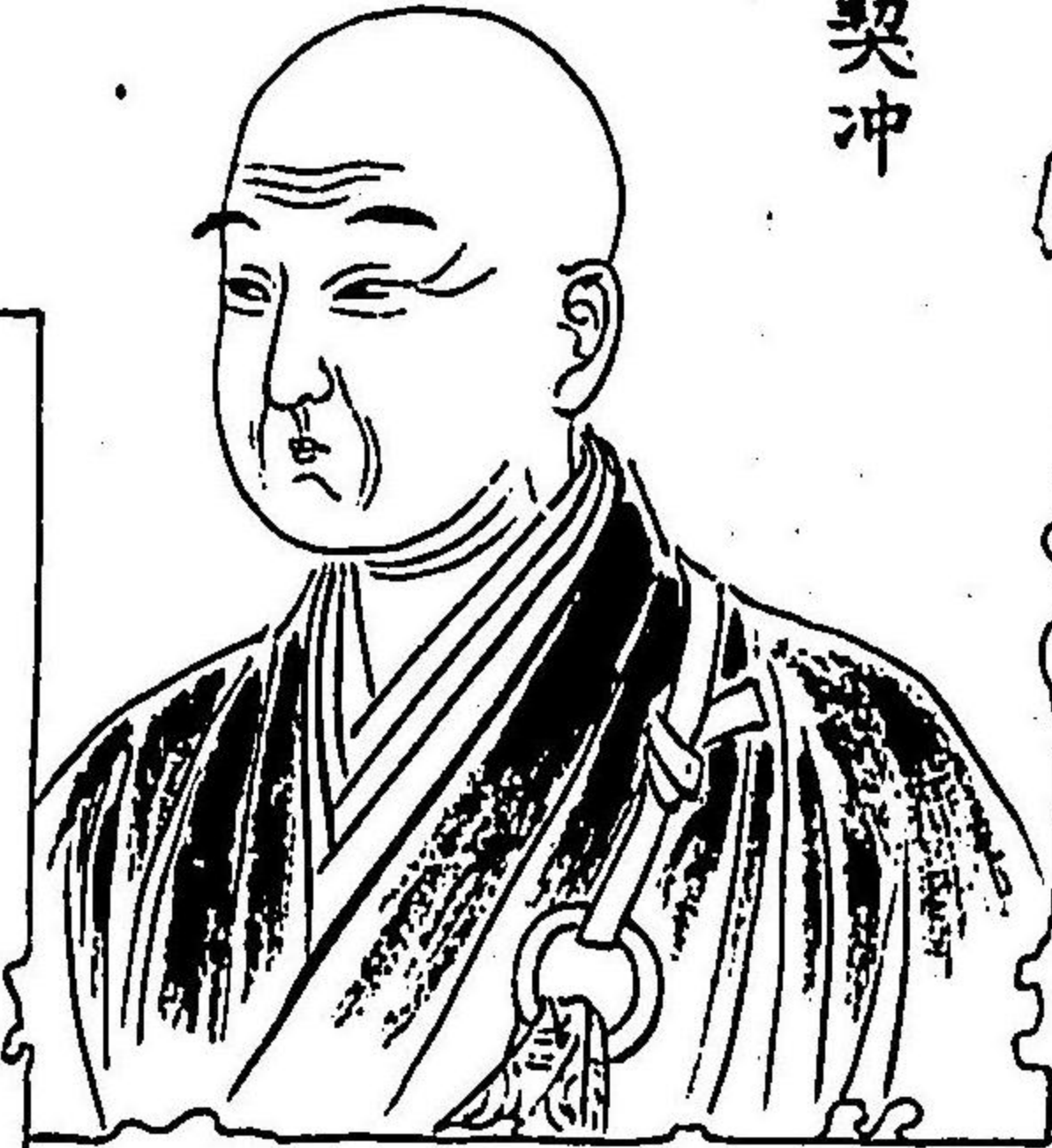
亦能く古體を摸して其の妙を得たり。『萬葉考』『祝祠考』『冠辭考』『國意考』『文意考』『源氏物語新釋』『伊勢物語古意』『古今集打聽』『岡部日記』等は學殖の豊富なるを見るに足るべし。家集を『加茂翁家集』『縣居家集』『縣居落穂』といふ、別に歌學の意見を述べたるものに、『歌意考』『初學』の二書あり。明和六年十月三十日、齡七十二にて歿しぬ。

かくの如く古體の和歌を尊へるもの、世に之を萬葉派の歌人といふ。契沖の『漫吟集』、長流の『萍水集』、春滿の『春葉集』、宣長の『鈴廼屋集』、春海の『琴後集』、千蔭の『うけらが花』等は、眞淵の家集と共に此の流派を代表するに足るものなり。然るに、萬葉派の歌は、往々崇古の弊に流れて、故らに古語を弄する傾向あり。是に於いてか、萬葉派以外また別に一旗幟を立て、歌道の復古を唱へたるものあり。小澤蘆庵・香川景

樹の輩即ち是れなり。

小澤蘆庵(二三八三—二四六一)は尾張の人あり。後京に移りて冷泉爲村の門に入りて歌道を學び、また自ら古學を研究して、終に一家を成せり。蘆庵の歌道を古に回さむとする趣旨は、歌語にあらず、歌體にあらず、其の精神にありき。即ち萬葉派の人々の如く、古語を用ゐて古意を表はさむとするにあらず、平語をもて思へる儘を述ぶるにありき。蘆庵元來飄逸の士、門戸を張り名を求むる徒に非ず。雖も、おほ宣長をして、都に歌人蘆庵あり、東に文人春海あり、到底わが企て及ぶべきにあらずと嘆稱せしめたり。當時、京都には伴蒿蹊、僧慈延、同澄月等世に聞ゆる歌人ありて、蘆庵は是等と共に和歌の四天王と呼ばれたり。著すところ、『六帖詠藻』、『蘆かび』、『塵ひち』、『或問』等あり。享和三年七月十一日、齡七十九にて逝け

契沖



賀茂真淵



本居宣長



香川景樹



り。  
香川景樹(二四三〇—二五〇三)は因幡の人、荒井某の子なりしが、後京に出で、歌人香川黃中に養はれぬ。桂園と號し、觀鷲亭又東鳩亭ともいふ。徳大寺家に仕へて従五位下肥後守たり。其の歌論は蘆庵の説を大成したる趣あり。歌は調にあり、調はすべて優美なるべし、自然の性情を巧まず飾らず、平語のまゝにて述べれば、おのづから調も整ひて美しき歌となるべしといへり。故に、景樹の歌は調なだらかに姿美きもの多し。然れども、雄々しきところ少く又あまり姿調を重んじたるために、往々没趣味となれるものあるは、其の弊なるべし。景樹の所説一時大に行はれて、桂園の門下殆ど全國に洽く、就中熊谷直好・八田知紀・穂井田忠友・渡忠秋・桂門の四天王と呼ばれて、名聲四方に傳はれり。今も尙ほ景樹の流を汲

むもの少からず。其の著『古今集正義』『新學異見』は景樹の語學及び歌學の意見を窺ふべく、『桂園一枝』は其の詠を見るべし。此の外『中空日記』『土佐日記創見』等の著あり。天保十四年三月三十日逝りぬ。享年七十四。

以上に見えたる者の外、有賀長伯(二三二一—二三九七)、富士谷成章(二三九八—二四三九)、上田秋成(二三九二—二四六九)、清水濱臣(二四三六—二四八四)、橘守部(二四四一—二五〇九)、足代弘訓(二四四四—二五一六)、萩原廣道(二五二三—二五三三)、中島廣足(二五二四—二五三三)、井上文雄(二四六〇—二五三一)等、亦詠歌に巧なりき。歌學の書には、長伯の『和歌八重垣』『和歌薙の塵』、成章の『和歌梯』、守部の『長歌撰格』『短歌撰格』等、歌集には成章の『北邊家集』、濱臣の『泊泊舍集』、秋成の『藤篋冊子』、弘訓の『家集』、廣足の『檀園歌集』、文雄の『調鶴集』『家集』等名高きものなり。

のなり。

鶯

下河邊長流

鶯の 朝いせさせぬ 春にあひて 木の芽も冬の ねふりさむらむ

花の散るを見て

同 人

櫻花 人のうらみを こきませて 木蔭の雪を いたくつもれる

柳

同 人

わが爲に 道は拂へど 青柳の しづねは駒の ほどしなりけり

難波にありてよみける

同 人

いねがてに 幾夜をながめ なれぬらん 物思ふ身を 月にしたしき

春立ちける日によめる

僧 契 冲

梓弓 春來にけりと 久方の 空しかすめば あらかねの 土もたがはず 山のはの 雪も消えそめ 水のおもの 氷もどけて 鶯の うら若き音に 梅が枝の その初聲の めづらしく さこゆる時は くられていにし 年のをしさも 忘られて 今幾日あらば 野へに出て 若菜つまゝし 子の日どて 小松ひかまし 青柳は いつかもえなむ



さくら花 いつか咲かむと 人ごとに 待つこと多く なれる今日か  
な

編中送日

同 人

心ある 人に一夜の やどかりて なるゝもかなし あすの故さと

古寺の花

同 人

山寺の 花は残りて 鐘のおとに 今日もくれぬと 人ぞ散りゆく

芳野山の花を見てよめる

加茂 眞淵

ことさへぐ 人の國にも 聞ゆ來ず わがみかせにも たぐひなき  
よしの高根の さくら花 咲きのさかりは 馬なべて 遠くもみさけ  
杖つきて 嶺にも登り 見る人の かたりにすれば 聞く人の いひ  
もつがひて 天雲の ひかふすきはみ 谷ぐゝの さわたるかぎり  
めでぬ人 こひぬ人しも なかりけり しかはあれども 世の中に  
さかしらをすど ほこらへる 翁がどもは 八百よろづ よろづの事  
ら きゝしより 見の劣るぞと いひつらひ ありなみするを 峯見  
れば 八重白雲か 谷見れば 大雪降ると 天地に 心おどろき 世

の中に 言もたえつゝ 行く牛の 遅き翁が うつゆふの せかりし  
心 悔いも悔いたる

反歌

もろこしの 人に見せばや みよしのゝ 芳野の山の 山櫻花

花のもとに弓射るかた

同 人

さくらばな 花見がてらに 弓射れば 鞆の響に 花ぞ散りける

原月

同 人

はりまぢや 夕霧はれて 久方の 月おしてれり いなみのゝ原

山家冬

同 人

くれゆけば 籬に鹿ぞ そよぐなる 只かくながら 秋や鳴きけむ

本末の歌

本居 宣長

河上の 丹生のそま山 斧とりて 眞木の 大木を 中のまを 宮木に  
きりて 山づみに のこしてまつる 本末の ことわりしるく 赤ね  
さし 豊さかのぼる 日の本の これの山跡は かけまくも あやに  
かしこき 天照らす その日の神の あれまじゝ 本の御國と その

御子のしらす御國と、その神の御蔭かゝふる、天地のそこひの  
うらに天傳ふくだちの末に、むらぎものむらがりつゝき玉だ  
れのをくに大國も、八十と國は多けど、日の末の、その國々は  
末國と、すゑのしわざにもちどりのかゝらひなづみ、言さよく  
いひはいへども、さす竹の君をなみして、やつこらは、君にかはり  
み、君らほも、奴になりみ、芳野川、早き時より、國のもと、道の本  
はし、水鳥のたゞすとほらす、かりごもの、亂れてあるを、本國は  
本の神世の、御よさしの、本のまに、いそのかみ、ふる野の道の  
本がしは、本かたくして、望月の、かけすうごかず、久方の、天つ日  
嗣は、神ながら、いやつぎ、むくさかに、傳はりまして、大君  
は、神にしませば、高みくら、高き御かけを、ものゝふの、八十伴の  
をも、天の下、四方の御民も、ところつら、いやとこしへに、かして  
みて、あふぎまつろひ、たまきはる、世々をしふれば、人國の、教よ  
ろしと、さかしらを、ならはひ學ぶ、人はしも、多くあれども、たま  
ちはふ、神のめぐみと、しかすがに、本を忘れず、未々の、いさ、け

あさも、いにしへの、あをを尋ぬる、本國の、てふりずるはし、こゝ  
をしも、あやにたふとみ、言舉せぬ、國とはいへど、ことあげして、  
たゝへまつらく、葦原の、水穂の國は、百八十の、國のおやくにも  
ゝやその、國のもどくに、うまじくに、は國眞秀國、うらやすの國  
反歌

世の人の、本のもとする、思はずて、末のもとする、いふがおろかさ  
妙法院一品の宮の御前にけふの細布に添へて奉れる歌

村田春海

あづまちの、みちのおくなる、賤の女が、なれて手わざと、おるはた  
は、むかしもかくや、山河の、はやき世よりも、胸あはぬ、ものなり  
けりと、細布の、狭きためしを、言の葉に、いひつぎにけり、これぞ  
この、いやしき賤が、身にまどひ、み雪ふる日の、寒けさを、忘れむ  
爲ど、おりいづる、布にしあれば、よき人は、誰もすすめず、しかれ  
ども、時にひかれて、物みなは、かはるならひを、すなはなる、賤が  
業さて、うつりゆく、世にも移らず、いにしへの、手ぶりを今に、傳

へくる 事なめでたき こそをしも あやにひかしみ いはまくも  
 ゆゝしけれども ふりにける ことしのばする 大きみの み手にど  
 らして はるかなる 鄙の手わざに 遠き世を みそなはせとて 細  
 布を さゝけもちきて かしこきや みはしのもとに 今日たてまつ  
 る

反歌

みちのくの けふの細布 せばけれど 古き手ぶりは 今も残れり

曉水雞

同 人

横の戸を 叩けばやがて あくる夜の 水鶏は人を はからざりけり

暮山春望

同 人

花の色は 霞のうちに なほ見えて 松よりくるゝ 春の山もと

長瀬眞幸やよひばかり古郷へ歸るを送る歌

橘 千 蔭

吾はもよ 入江のす鳥 君はもよ 雲のゆくたづ 春がすみ つばさ  
 にわけて 足引の 高根の花に うちあふき 行くらむ日すら おく

れるて うらなけをらむ 千里ゆく つばさにしあれば あすのこと  
 天つ雲路を 飛びかけり 又も來まされ 待ちつゝをらむ

反歌

高くとぶ つばさしあらば 櫻咲く あら山中も おひしかましを

五月雨晴

同 人

五月雨も かぎりあればや あふち散る をかべの庵に 夕日さしけり

河春曙

同 人

夜をこめて みを引きのぼる 舟の帆の 籠にしらむ 刀禰の河づら

寒山月

同 人

聲たてぬ 嶺のをしかの 跡見ゆる 霜にふけゆく 冬の夜の月

玉河

小 澤 蘆 庵

鶉鳴く 野路の秋萩 散りすきて ひかり隠るゝ 多麻川の水

月夜舟

同 人

あどかれて 夜半にや出でし 港舟 からろの音の 月に聞ゆる

橋雨

同 人

旅人の かつく袂に 雨見えて 雲たちわたる 木曾のかけはし

寄鳥糞 同 人

里ごとに 鳥が今啼く その鳥に ならひて時を 知る身ともがな

安倍仲麿を明州の海邊に餓したる 香川景樹

夜行けど 月の光し 清ければ あらはれわたる 唐にしきかな

河上花 同 人

大堰川 かへらぬ水に 影見えて 今年も咲ける 山櫻かな

事につき折にふれたる 同 人

妹といで、若菜つみにし 岡崎の 垣根こひしき 春雨がふる

子と思ふ 道はいかなる 道なれば 知るよりやがて 踐迷ふらむ

人知れず 花とふたりの 春なるを 待たせても咲く 山櫻かな

關路行客 熊谷直好

關の戸は 今わけぬらし 波のくくと 菅の小笠の 數ぞ見ゆゆく

早春水 同 人

山里の 寛の水の 音すなり のひかりや かよひそむらむ

馬上眺望

八田知紀

乗る駒の 早きを何に 頼みけむ あかぬ野山も ありけるものを

遠旅 同 人

都いで、 遠くこしぢの 旅なれば かへる山のみ ながめられつゝ

見花 足代弘訓

見ても又 見まぐろはしき 山櫻 なるゝを花は いとはざるらむ

梅薫夜風 同 人

梅が香の いかぬる夜も 匂ふらむ 枕定めず 風や吹くらむ

霧隔行舟 萩原廣道

舟人の せよみまぎれて 行く方や 霧立つ海の 沙路なるらむ

朝春雨 同 人

花鳥に いとなき心 たゆまれて 朝いのどけき 雨の音かな

郭公遍 中島廣足

風わたる 花橋に ありそひて 鳴く音をちらす 時鳥かな

山花似雲

井上文雄

いつはりの花は風に晴れにけり。残れる雲や櫻なるらむ

和歌の外に、又一種狂歌といふものあり。是は着題措辭共に卑俗を避けず、主として滑稽の想を歌ひ、又諷刺の意を寓す。古は俳諧歌の名稱の下に只歌人の遊戯として行はれたるものなるが、本期に入りては、漸く専門の技となり、享保の頃大坂に由縁齋貞柳(二三九四歿)起り、寶曆の頃其の門人栗柯亭木端芥川貞佐等出で、之を振興せり。次で天明年間江戸の市井に流行するや、更に規模を擴めて所謂天明調となり、爾後寛政より文化文政に亘りて發展の頂に達し、此の間に有名なる狂歌師輩出せり。朱樂菅江(二三九八—二四五八)唐衣橋州(二四〇三—二四六二)大屋裏住(二三九四—二四七〇)。

手柄岡持(二三九五—二四七三)四方赤良(二四〇九—二四八三)鹿都部眞顔(二四一三—二四八九)宿屋飯盛(二四一三—二四九〇)等即ち是れなり。中に就いて、四方赤良宿屋飯盛の二人最も顯る。

赤良、姓は太田、名は覃、一に南畝と號し、又蜀山人とも寢惚先生とも呼べり。幕府の士なり。博學多識にして、諧謔に長じ、諷刺を能くし、狂名四方に鳴りぬ。著書に『千紫萬紅』『萬紫千紅』『四方の赤良』『蜀山百首』等あり。狂歌以外の著述に、『一話一言』『南畝莠言』『假名世説』『浮世繪類考』等あり。

飯盛は一に六樹園ともいへり。江戸の市人石川雅望の狂名なり。飯盛初は旅亭の主人なりければかく名づけたるなるべし。『狂歌百人一首』『萬代狂歌集』等の著ありて、狂歌は其の最も得意とするところなりしが、又雅文をも能くし、古語に

も通じたり。即ち其の著『雅言集覽』は國語學上の一大著述  
ともいふべく、『源註餘滴』また見るべきものなり。其の隨筆  
に「ねざめのすさび」あり。

此の外、平秩東作(二四四五)、馬場金埒(二四六七)、森羅萬象  
(二四二二)―二四九二、橘庵田鶴丸(二四一九)―二四九五、加茂  
季鷹(二四一一)―二五〇二等、狂歌師の名を負へるものなほ  
多かりきといへども、到底赤良、飯盛等には及ばざりき。狂歌  
の集に『狂歌題林抄』『狂歌すまひ草』『狂歌武射志風流』『徳和  
歌後萬歳集』『狂歌才藏集』等あり。上に列舉せる狂歌師の詠  
を窺ふべし。

定家卿月を見る繪に

四方赤良

十五夜に

かたよく月の

歌よめば

あかつきの鐘

ごん中納言

神無月の歌

同

人

神無月

出雲の神の

よりおひに

仲人口を

さこしめせと申す

早春

同

人

生酔の 禮者を見れば 大道を 横筋かひに 春は來にけり

六十三になりける年の初面箱と鈴かきたる扇を見て

同

人

あらたまの 年も六十 三番更 とうくたらし たらり長いき

八月十五夜

宿屋飯盛

いかでわれ 項羽が力 もちの夜に 月の隠るゝ 山を抜かまし

しのゝめに雁の渡るを聞きて

同

人

火打箱 ふたわけがたに 鳴連れて 鴻雁なんぞ はくちより來る

歸雁

同

人

氏なくて 玉のこし路へ 行く雁を 人もあふぎて 見る北の方

氷室

朱樂菅江

夜のみをも 寝ずに守らん 氷室もり 此の丹賊を 水になさじと

春日

唐衣橋洲

かすみては 時めく花の 王にさへ 笠をぬがさる 春の夜の月

蝨

蝨もと 草のへんくわが 玉なれば どれや川邊の あしをさることも

春日

鹿都部眞顔

春の日の ひど日は冬の みかの原 又晝寝せん 枕かせ山

安永庚子の歳の暮に

平秩東作

飲みてはね 食うてはやがて ねの歳の あけなば春も 丑になるべく

志賀山越

馬場金塚

雪ならば いくら酒手を ねだられん 花の吹雪の 志賀の山越

雀踊の書に

手柄岡持

ころも手の 脊中の紋の 釘ぬきに 緋を通して つなぎなば 一も

んやつこ なるらめど 大手下馬先 旅さきも まづ通用は よし田

御油 赤阪やつこ ふるき名に おふささるさも 合點じや あれさ

これさの かけごゑに よけて通して くれ竹の よに傳へたる う

つし書の すいめ踊を ひど筆に ちよいとかく内 角すけが ふり

もたへなる 身のひねり 路考杜若を ふんぬきの 二合半でも た

ましひは 金平鐵平 折すけど さへづる聲も 君にちうくすい  
めらが をせる手足も 豆奴 そのまめの字を ちうくくと鳴く

第三節 俳句 附狂句

室町時代の末造に至り、連歌の一轉機を見たる事は、既に其の期の第貳章第貳節に於いて之を説きたり。即ち、彼の宗鑑と守武とは、本歌調の連歌が宗祇以後繁雜なる法則の中に拘束せらるゝを厭ひて、俳諧調を主唱し、世の歡迎するところとなりたりき。此の時代に入りては、寛永年間に松永貞徳(二二三一—二三一三)出で、古文學上の智識と天稟の偉才とを以て『淀川』『油糟』『御傘』等の書を著し、以て宗鑑等の謬妄を辨じ、只管斯道の法式を論ぜしかば、俳壇一時之がために風靡せられぬ。貞徳派の俳諧は、宗鑑派のそれの如く専ら滑

稽奇智を弄するものにあらず、頗る優美にして雅趣に富めるもの多し。然れども、思想は單純なるものに過ぎず。俳句に於いても亦然り。世に之を古風といふ。其の高弟に野々口立圃(二三二九歿)、安原貞室(二三三三歿)、雞冠井令徳(二三三四歿)、山本西武(二三三八歿)、松江維舟(二三四〇歿)、北村季吟(二二八八―二三六五)、高瀬梅盛(二三五九歿)等ありて、各一方に雄視せり。其の頃、杉田望一(二二〇八―二二九〇)といふもの、別に守武の俳風を慕ひて伊勢に起り、後年に於ける伊勢風の礎をなじき。此の頃より俳諧は漸く第二のものとなり、俳句之に代りて主位を占むるに至れり。

かくて寛文の頃、難波に西山宗因(二二六五―二三四二)といふものあり、古風の俳諧に對して一派を立て、名づけて談林風といへり。姿情共に貞徳派の單純なるに似ず、豊富自在に

して飄逸奇想、人生の弱點を穿つに妙を得たり。當時古風に倦厭せる俳人等、其の門に集るもの甚だ多かりき。其中、井原西鶴(二三〇二―二三五三)、田代松意、寛文延寶頃等を逸群とす。然れども、談林の俳風も暫くにして其の末派の誤解するところとなり、狂言綺語を旨とするものとなりしかば、漸く其の弊を厭ひて他を望むものあるに至れり。これを天和貞享の交とす。此の時に當り、松尾芭蕉深遠偉絶の才を以て、初め貞徳派に入り、中ごろ談林風に移り、終に一派を開きたり。蕉風又は正風ともいふもの是れなり。

芭蕉(二三〇三―二三五四)は、一に桃青とも號せり。伊賀の藤堂家の臣なり。通稱を忠左衛門といひ、諱を宗房といへり。廿二歳の時、主家を辭して京に赴き、北村季吟の門に入りしが、後數年を経て江戸に下りて深川に住みぬ。其の學者莊に私



淑し、氣宇恬淡にして喧噪を喜ばず。故に其の吟概ね幽玄にして、往々禪味を帯びたれども、之が爲に自然に遠ざかることなき。常に諸國を行脚して、優遊自適一に俳想を養ふことを力めたり。元祿七年十月十二日大阪の僑居に逝きぬ。著書に『貝おほひ』『猿蓑』『續猿蓑』『ひさご』『笈の小文』『奥の細道』等あり。其の全集に『芭蕉翁一代集』あり。其の門に遊ぶもの無慮數千人、全國到るところ門人在らざるはなし。就中榎本其角(二三一一―二三六七)、服部嵐雪(二三一四―二三六七)、森川許六(二三一七―二三七五)、各務支考(二三二五―二三九二)、越智越人(二三六二)、向井去來(二三〇三―二三六四)、内藤丈草(二三二二―二三六四)、河合曾良(二三六九)、志田野坡(二三二二―二三四〇)、立花北枝(二三七八)は世に蕉門の十哲と呼ばる。其の他の高弟中、伊勢風を建てし岩田涼菟(二三七七

歿)、葛飾風を立てし山口素堂(二三〇二―二三七六)、太白堂の祖天野桃隣(二二九九―二三七九)、鳴立庵の祖大淀三千風(延寶・寶永頃)の如きは、江戸坐の其角、雪中庵の嵐雪、美濃派の支考と上下して、其の名聲俳壇に藉甚せり。是に於いてか、全國の俳風は悉く此の一派に歸しぬ。然れども、蕉風の俳諧も亦其の隆盛の極幾何からずして俗了せられ、閑寂の俳想は展轉して、難解殆ど謎の如きものとなれり。

安永・天明の頃、谷口蕪村(二三五六―二四四三)、大島蓼太(二三六八―二四四七)、加舎白雄(二三九九―二四五二)、加藤曉臺(二三九一―二四五二)等出で、俳風の刷新を謀り、稍古に復する觀ありしが、到底蕉風創始の當時に及ばざること遠かりき。横井也有(二三六二―二二四三)及び女流の俳人加賀の千代(二三六二―二四三四)亦其の頃の名家たり。文化・文政の交

は俳壇中興の後を承けてさしたる消長を見ず。天保の頃成  
 田蒼虬(二四二一—二五〇二)櫻井梅室(二四二九—二五一二)  
 田川鳳朗(二四二二—二五〇五)當時の三俳人として特に稱  
 せられぬ。而も天保時代の中興時代の及ばざりしこと、恰も  
 中興時代の創始時代に若かざりしに似たり。天保以後に於  
 ける俳壇の俗了は、此に詳述する價值なきまでに立到れり。  
 俳句を集めたる書は、以上に見えたる外、後人の手に集めら  
 れて、各人大抵一家の集無きはなし。俳諧を論ぜるものには、  
 岡西惟中(二二九九—二三五二)の『近來俳諧風躰抄』、去來の  
 『旅寢論』、支考の『俳諧十論』等、僻説多し。雖も、世に名あるも  
 のなり。

皆人の 午睡のたねや 秋の月  
 甜らせて 養ひたてよ 花の爲

松永貞徳  
 同人

庭にさへ さぞな落葉は 東山  
 順禮の 棒ばかり行く 夏野かな  
 いざ登れ 蛙蛾の 鮎くひに 都鳥  
 嵐吹く 枝葉も見えず 彌生山  
 袖がきの 縫か朽葉の 蕨かづら  
 女郎花 たとはいあはの 内侍かな  
 祭る日も 傘はさすなり 春日山  
 それと聞く そら耳もがな 時鳥  
 世の中や 蝶々とまれ かくもわれ  
 白露や 無分別なる おきどころ  
 鯛は花は 見ぬ里もあり 今日の日  
 雪折れや 昔にかへる 傘の骨  
 花の雲 鐘は上野か 淺草か  
 雲雀より 上にやすらふ 峠かな  
 京にても 京なつかしや 時鳥

野々口立園  
 松江維舟  
 安原貞室  
 山本西武  
 鶏冠井令徳  
 北村季吟  
 高瀬梅盛  
 杉田望一  
 西山宗因  
 同人  
 井原西鶴  
 田代松意  
 松尾芭蕉  
 同人  
 同人



弱點を捉ふるに、着想意外にして、まゝ讀者を絶倒せしむるものあり。雖も、猥陋の極士君子の口に誦し難きもの亦少からず。此の物の起原は寶曆頃なりしが、天明年間柄井川柳(三四五〇)歿の鼓吹によりて、大に興り、文化・天保の間に於いて隆盛を極めたり。句集を『柳樽』といひ、本期の末に至る迄に數十百篇を重ねたり。

おとがひで 頼の筆法 はねて讀み

紫震殿 入札に来る みせ物師

放れ馬 むざり討死 する覺悟

手持なく 辭世をはめて 醫者はたち

### 第四節 淨瑠璃 附脚本



松尾芭蕉

近松門左衛門

淨瑠璃は、前期即ち室町時代の末に、織田信長の侍女小野阿通といふもの、『平家物語』、謡曲等に倣ひて、『淨瑠璃十二段草子』を作りたるが始なりと世にいひ傳へたり。然れども、輓近の研究に據れば、織田氏以前に既に淨瑠璃ありきといへば、阿通が此の物を創作せりとの説は信じ難し。徳川時代に至りては、寛文延寶の頃、岡清兵衛重俊(二三四六歿)といふもの江戸に出で、膂力絶倫なる勇士の業績を淨瑠璃に作り、之に節譜を附したるが世に行はれたる、是れ進歩の端緒あり。ついで、貞享元祿の交、近松門左衛門非凡の天才を以て大阪に出づるに及び、更に大成して全篇を五齣とし、首尾一貫せるものこそせり。其の材料を史上の事實に採れるを時代物といひ、現時の出来事に採れるを世話物といふ。當時の淨瑠璃は操人形もて劇を演ずるに當り、之に合せて語りたるもの

なり。

近松門左衛門(二三一三—二三八四)は長門萩の人、其の家世々毛利家に事へたり。初め杉森彦四郎信盛といひしが、少歳髪を削りて肥前唐津の近松寺に入りつ。後還俗して京都に出で、一條家に仕へて従六位に叙せられ、既にして職を辭して大坂に往き、専ら淨瑠璃の著作に従事せり。其の作るころ無慮數十篇、孰れも靈妙の筆能く人情の機微に觸れ、篇中の性格一々活動して眞に迫り、一小天地に遊ぶ想あり。就中、『伊達染手綱』『鎗權三重惟子』『心中重井筒』『夕霧阿波鳴門』『心中天網島』『女殺油地獄』『冥途飛脚』『國性爺合戦』『雪女五枚羽子板』『曾我會稽山』等最も名あり。門左衛門別に巢林子又平安堂と號せり。享保九年十一月廿三日、齡八十三にて歿しぬ。

かくて門左衛門の作大に世の好評を博せしは、爾來淨瑠璃を作るもの之に倣はざるはなきに至れり。元文寛保より寶曆明和へかけて、竹田出雲(二四〇〇)歿、並木千柳(二三五三—二四〇〇)紀海音(二四〇七)歿、三好松洛(生死の年未詳)近松半(二三三八—二四四三)平賀鳩溪(二四三九)歿等相尋いで出で、各數多の著作を爲せり。其中、出雲の『假名手本忠臣藏』『菅原傳授手習鑑』『義經千本櫻』『千柳の』『一谷嫩軍記』、海音の『八百屋お七歌祭文』『心中二腹帶』、松洛の『御所櫻堀川夜討』『平假名盛衰記』、半一の『奥州安達原』『妹背山婦女庭訓』『伊賀越道中雙六』『本朝廿四孝』『關取千兩幟』、鳩溪の『神靈矢口渡』『金毘羅利生記』等は、脚色複雑變化の妙に富むを以て特に稱せらる。然れども、之を門左衛門の作に比すれば、人物の活動を缺ける嫌ありとす。鳩溪には別に經世實用の著及び諷

刺諧謔の作あり。

然るに、此の頃浄瑠璃の外、また別に狂言作者と唱へて歌舞妓狂言の脚本を作るものありき。脚本とは演劇の臺詞を始め、舞臺の模様、俳優の動作、服装等の注意をも記したるものをいふ。從來歌舞妓狂言に用ゐたる脚本は、大抵俳優等の作に係るものなりしが、此に初めて、俳優以外に作者を出すに至りしあり。明和・安永の交より文化・文政に至りて其の數甚だ多し。櫻田治助(二四〇八一—二四八〇)の『名譽仁政録』、碁盤忠信『明烏花濡水』、並木五瓶(二四二一—二四八二)の『平井權八吉原衢』、『五大力』、鶴屋南北(二四一五—二四八九)の『於染久松色讀賣』、『四谷怪談』等最も著名なり。

浄瑠璃の作者は、歌舞妓狂言の榮えて操人形の衰ふるに共に、世に出づるもの次第に少く、亦名あるものありしを聞か

ず。狂言作者には、其の後河竹新七、瀨川如臯等の二三者ありきといへども、是れまた其の名を爲せるものにあらず。

『繪樓三重帷子』の一節

近松門左衛門

昨日は今日の初昔世の口にあふ茶の名所、人は氏より育ちかや、淺香市之進の留守の宿、おさいは流石茶人の妻、物好もよく氣も伊達に、三人の子の親でも、さやしや骨ほその生れ性、風忍ばしくゆかしくの、卅七とは見えざりし、數寄屋廻りの掃拭ひ、下女中間にもいろはせず、箒はなさぬ奇麗好、路次の飛石敷松葉、石燈籠は苦むして、巖となれる手水鉢、植込の木の下影の、落葉かくなる迄夫婦ながらへて、子供の末を高砂の、松の榮や祈るらん、中息子虎二郎、棹竹よこたへ、年季の角助杖ひつさげ、路次の中に走入り、景清是を見て、物々しやと夕日かげに、打物ひらめかいて、切つてかゝれば、堪へずして、刃向いたる強者は、四方へばつとど逃げにける。ゑいやつとらゝとどぞ打合ひける。ヤイ、くゝよい程にわがけよ、其所なぬくめ、見ごと男の數に入りながら、江戸の供さへ得しをらす、ちひさい子を相手にして、怪我でもさするか、數寄屋の壁に疵でもついたら何とする。是れ虎二郎、あの馬鹿

を相手にして、日がな一日悪あがき、一々口帳につけ、父様お歸りなされたら、きつと告ぐる待てゐやと叱られて、いや母様悪あがきはしませぬ、私は侍じや、鎗遣ひ習ひます。是れなう其方ももう十じや、その合點がいかぬか、侍は侍知れたこと、去りながら父様を見やいの、御前も能く、加増まで下された。武藝は侍の役珍しからぬ。茶の湯を上手になさるゝ故、人の用ひほんそうもある。幼い時から茶杓の持ち様、茶巾さばきも習うておきや。長々の留守の内、子供がわるう育つたといはれては、母が浮名も恥かしい。男の子は男の手祖父様へ往て、大學でも讀習や。馬鹿よ、供して暮方に連れ戻れど、内外までに氣を配る、留守こそ心盡しなれ。お菊は、流石姉だけの母様、いかにお世話、ちとお休みと、さし出す、薄茶々碗の音、羽山、大人くられたる振りを見て、孝行な、よういやつた。優しうなりやつた。妹のお捨は、姥と遊びに出た。そうな、行水も仕廻うてか、此の髪は誰れが結つた。万が細工と見へたの、鬘がまらつと下つた。頼もけんで愛想がない。つとの出し様、髪つきで、ようも悪うも見せる物、顔の道具相應に、眉が女子の大事の物、前髪もこうでない。母が直して遣りましよと、開く櫛箱鏡臺の、此鏡より世の中は、人こそ人の鏡なれ。

「菅原傳授手習鑑」の一節

竹田 出雲

其外山家奥在所の子供、残らず呼出して、見せても、似ぬこそ道理、土が産ましたはかり、芋、子ばかりよつて立歸る。身の上と源藏も、妻の戸浪も胸をすゑ、待つ間程なく入來る兩人、源藏、此立番が目の前で、討つて渡せと請合つた菅秀才が首、サア請取らう、早く渡せと、手詰の催促ちつとも臆せず、かりそめならぬ右大臣の若君、かき首ねぢ首にもいたされず、暫くは御用捨と立上るを、松王丸、サア其手はくはぬ、暫しの用捨とひまどらせ、逃げ支度しても、裏道へは、數百人を付置き、蟻の這出る所もない。生顔と死顔は、相好がかはるなど、身代りの膺首、それもたべぬ。古手な事して後悔すなど、云はれて、ぐつとせき上げ、サアいらざる馬鹿念、病みはうけた。汝が目玉がでんぐり返り、逆様眼で見ようはしらす、紛れもなき菅秀才の首、追付け見せう。サ、其舌の根の乾かぬ内に、早く討てと、斬れど、立番が權柄、ハツとばかりに源藏は、胸をすゑてを、入りにける。そばに聞居る女房は、愛ぞ大事と、心もそら、檢使は四方八方に、眼を配る中にも、松王丸、机文庫の數を見廻し、サア合點



のゆかぬ先だつて逝んだがさらには以上八人、机の敷が一脚多い、其の倅はどここに居るぞと見咎められて戸浪はハッと、イヤこりやけふ初めて寺イヤ寺参りした子がござんす。何馬鹿な、それ、是れが菅秀才のお机文庫と、木地を照した塗机、ざつとさばいて言抜ける。何にもせよ、隙をらす油断の元と、玄蕃もろともつゝ立上がる。こなたは手詰、命のせと際、奥にはばつたり首打つ音、ハッと女房胸をだき、ふん込む足もけしとむ内、武部源藏白臺に、首桶を載せてしづゝ出で、目通りにさし置き、是非に及ばず菅秀才の御首討ち奉る。いは、大切な御首、性根をすゑて、サア松王丸、しつかりと見分せよと、忍びの鏝元くつろげて、虚といは、切付けん實といは、助けんと、堅唾を呑んで控へ居る。ハ、何のこれしきに性根をこるか、今照玻璃の鏡にかけ、鐵札か金札か、地獄極樂の境家來乗、源藏夫婦を取巻きめされ、かしてまつたと捕手の人数、十手ふつて立ちかゝる。女房戸浪も身を固め、夫はもとより一生懸命、サア實檢せよ見分と、いふ一言も命がけ、うしろは捕手向ふは曲者、玄蕃は始終眼を配り、爰ぞ絶命絶命と思ふ内は、や首桶引寄せ、ふた引明けた首は小太郎、賈というたら一討と、はや抜きかける。戸浪は祈

願、天道様佛神様、おはれみ給へど女の念力、眼力ひからす松王が、ためつすがめつ窺ひ見て、ウムこりや菅秀才の首討つたは、まがひなし相違なしと、いふにびつくり源藏夫婦、あたりさよろゝ見合せり、檢使の玄蕃は見分の詞證據に、出かした、能く討つた、褒美にはかくまうた科ゆるしてくれ、イヤ松王丸片時も早く、時平公へれ目にかけん、いかさま隙取りてはおどがめもいか、拙者は是よりおいとまたまは、病氣保養いたしたし、サ、役目は済んだ、勝手にせよと首うけ取り、玄蕃はやかたへ松王は、かごにゆられて立歸る。夫婦は門の戸びつしやり、め、物をもえ言はず、青息といき、五色の息を一時に、はつと吹出すばかりなり。

## 第參章 散文

### 第壹節 總說

此の期の散文界は殊に富贍にして、殆ど該文學のあらゆる

種類を網羅せり。即ち漢學者は漢語交りの文牀を以て儒教主義を敷衍するあれば、之に對して國學者は古牀の文章を以て我が古學の旨を發揮するあり。其の他、小説・俳文・狂文等の作家頻々輩出、其の數星辰の多きも及ばず。是等の人の著作中、小説以下の外に、歴史・傳記・日記・紀行・隨筆・評論・考證の文一も備はらざるなし。今、是等を統合し、主として文牀の上より大別する時は、和漢混和文・雅文・小説及び俳文並に狂文の四種となる。即ち、之を次の四節に別ちて説くべし。尙ほ、雅文の條下に於いては、併せて當期文學の一大動力たりし古學回復の來歴を畧述せん。蓋し、雅文の發生并に流行は、國學者が古書の解釋、語法の討究等に關係最も密なるを以てあり。

早辰

### 第貳節 和漢混和文

漢學は、將軍家康以下徳川氏歴代の獎勵を蒙り、我が邦未曾有の隆盛を極めたり。然れども、漢文は専門家ならざるものゝ容易く解すべきものならねば、文教を弘布するの必要に迫られたる漢學者は、恰しくも一種の國文を創製したり。國語に漢語を混和せる文章即ち是れなり。是は前期に見えたる軍記・隨筆等の文に類す。雖も、一層漢文の素を加へたるもの、文法上多少の疵瑕を具せりと雖も、亦國文の一體に外ならず。縦横自在なる筆勢、跌宕雅健ある文體を以て、深遠なる學理を闡明するところ、往々國學者流の文の散漫に失するに優り、更に之を完成せむには、我が邦の普通文たるに最も適ひぬべきものなり。

此の期の初に當りて、専ら力を儒學に效せしを藤原惺窩(二)

二二二一—二二七九)とす。其の門に那波活所(二三〇八)歿、菅玄洞(二二八八)歿、堀杏庵(二三〇二)歿、三宅亡羊(二三〇九)歿、松永遐年(二三一七)歿、林羅山(二二四三—二三一七)等あり。就中、羅山最も顯る。此の人、名は信勝、後道春といへり。學問該博にして、夙に幕府の顧問に備はり、著書百七十餘種、中に所謂和漢混和牀の述作あり。其の文章は稍生硬を免れずと雖も、彼之道春點と唱ふる四書の訓點が、後に出でたる後藤點又は一齋點に比して、復に國語の格に合へるを見れば、如何に國文に通ぜしを知るに足るべし。道春は惺窩と俱に和歌の作ありき。

松永遐年の門に木下順庵(二二八二—二三五八)あり、順庵の門に雨森芳洲(二二八一—二三六八)、新井白石、室鳩巢等ありき。別に熊澤蕃山(二二八一—二三六八)、伊藤仁齋(二二八七—

二三六五)其の子東涯(二三三〇—二三九六)、具原益軒、荻生徂徠(二三二六—二三八八)、太宰春臺(二三四〇—二四〇七)等また各一派の學者ありき。其の混和文なる著書には、蕃山の『集義和書』、『集義外書』、『三輪物語』、『源氏外傳』、仁齋の『童子問』、芳洲の『たはれ草』、『橋窓茶話』、徂徠の『政談』、『南留別志』、『護園談餘』、東涯の『輜軒小錄』、『秉燭談』、春臺の『經濟錄』、『獨語』等あり。芳洲鳩巢亦歌作あり。然れども、和漢混和文の作者として當期を代表するに足るものは、具原益軒、新井白石、室鳩巢の三人とす。

具原益軒(二二九〇—二三七四)は、通稱を久兵衛、名を篤信、別號を損軒といへり。筑前福岡の藩士なり。明歴中京師に出で、松永、木下、山崎諸家の門に遊び、勤學數年の後、其處に帷を下して教授せしに、從學する者甚だ多かりき。太宰春臺は最

も人を許さざるものなりしに、尙ほ益軒の博學、洽聞を稱へて海内無雙なりといへりぞ。益軒高名の下に身を持つること謙遜、恒にみづから韜晦して謹慎を主とせり。暇あれば則ち勝地、舊蹟を探りて、其の足跡の及ばざる處殆ど無かりき。著書一百餘種、皆實用を主として平易なる和漢混和文を用ゐ、婦女、童幼といへども理解し易からしむ。故に、其の文謹嚴にして墾到なれども、往々冗漫、重複に失する嫌なきにあらず。『初學訓』『童子訓』『大和俗訓』『養生訓』『家道訓』『樂訓』『女大學』『慎思錄』『大和本草』『和名本草』『花譜』『菜譜』『大和廻』『京廻』『岐蘇路の記』等最も世に行はる。『日本釋名』と題する著書は、我が國語の性質、根源を説きたるもの、牽強の辯多しと雖も、實に我が言語學に關する書典の先驅たり。正徳四年八月廿七日、八十五歳にて歿せり。

新井白石(二三一七—二三八五)通稱は勘解由、初の名は瓊、後に君美と改めき。幼にして岐嶷聰敏、長ずるに及びて大志あり、曰はく、大丈夫生きて封侯を得ずんば、死して將に閻羅王となるべしと。順庵の門に入りて經史を攷究し、勉強衆に超えたり。業成りて古河の堀田侯に仕へしが、志を得ざりしを以て退きぬ。既にして、徳川家宣の尙ほ甲府にありしに徵されて儒員となり、其の將軍職を拜するに及びて、隨ひて幕府に入り、從五位下筑後守となりて、祿千石を賜はりぬ。其の所遇、啻に侍講たるに止まらず、寧ろ内外政務の顧問として、獻策する所一として用ゐられざるはなかりき。朝鮮の來聘使接見につきて、彼我の名分を正せる、惡貨鑄造の改善に就きて、勘定奉行萩原重秀を彈劾せる、さては林信篤と將軍家繼の喪服の事を論ぜし如きは、殊に人口に膾炙せる所なり。將

軍吉宗統を承くるに及び、仕を致して老を明窓淨几の間に養ひ、享保十年五月十九日、齡六十九にて卒せり。白石、博學洽聞にして識見甚だ高く、其の施さむとする所専ら實用に在り。生涯の述作三百餘種、中に巧妙なる和漢混和文を以て綴れるあり。此の種の書籍中、『藩翰譜』、『讀史餘論』、『古史通』、『折焚く柴の記』殊にあらはる。『藩翰譜』は、甲府にありし時、君命を奉じて撰びたるもの、慶長五年より延寶八年に至る八十餘年間に於ける列侯三百三十七家の傳記を詳述す。其の文稍單調に失する弊あれども、道強にして明瞭、蓋し混和文の粹なり。『讀史餘論』は、我が邦古今の治亂盛衰を論じたるもの、文致は『藩翰譜』よりも劣れ、論旨燃犀能く史論の体を得たり。『折焚く柴の記』は白石の自傳、混和躰の中に雅文の趣を備へ、亦流暢なり。其の他、『東雅』の國語の歴



貝原益軒

新井白石

室鳩巢

史及び語源を、『東音譜』の綴字法を、『同文通考』の假字の沿革を述べたるは、語學上の意見を知るべく、『采覽異言』、『西洋紀聞』等は外來語研究の資料たるべし。『古史通』はた一個の好著述なり。

室鳩巢二三一八一—二三九四、通稱新助、名は直清、又順庵の高弟なり。初は加賀侯に仕へしが、後白石の推舉によりて幕府の儒員となり、八代將軍吉宗の優遇を蒙れり。其の第宅江戸駿河臺に在りしを以て、世人目して駿臺先生といへり。其の著『駿臺雜話』、『鳩巢小説』最も名高し。『駿台雜話』は老後病間に執筆せし隨筆なり。文章は和漢の故事を引用すること多く、まゝ意味晦澁の跡あれども、森嚴にして而も興味あり。又『鳩巢小説』は主に白石との談話等を記したるもの、其の文章亦前に同じ。別著『六諭衍義和解』、『五常五倫名義』は將軍吉宗の

命を受けて述作せるもの、一時大に行はれたり。享保十九年八月十二日、齡七十七にて逝きぬ。

此の外、中井養庵(二三五三—二四一八)の『こはずがたり』、柳澤淇園(二三六六—二四一八)の『雲萍雜誌』等亦世に名あり。天明・寛政以降は漢學者として有名なるもの尙ほありしかども、漢詩・漢文を能くする者こそ多かれ、和漢混和體の散文に巧なるものは比較的に少かりき。只わづかに中井竹山(二三九〇—二四六四)の『草茅危言』、湯淺常山(二三六八—二四四一)の『常山紀談』、菅茶山(二四〇八—二四八七)の『筆のすさび』、成島司直(二四三八—二五二二)の『徳川氏實記附録』、太田錦城(二四二五—二四八五)の『梧窓漫筆』、朝川善庵(二四四一—二五〇九)の『善庵隨筆』、橘南谿(二四六五歿)の『東西遊記』、藤田東湖(二四六六—二五一五)の『常陸帶』等の數種ありし。

のみ。此の中、『常山紀談』筆のすさび、『東西遊記』の文觀るべし。漢學者にあらざれども、伴蒿蹊の『近世畸人傳』、『閑田耕筆』、『閑田次筆』、富士谷御杖の『北邊隨筆』、山崎美成の『名家略傳』、『提醒紀談』、『耽奇漫錄』、『二養雜記』、瀧澤馬琴の『玄同放言』、『燕石襍志』、『烹雜の記』等また此の種の文體なり。

貧富天壽『樂訓』

貝原益軒

同じく人と生れて、富貴なる人あり、貧賤なる人あり。其高下の品賦に多し。富貴なる人は、おごらずして人を恵むを樂とすべし。乞丐も、生れ付きたる分ありて定まりたる事を悟り、分を安んじて樂しむべし。たとへば、松は高さ事數十尺に至り、平地木は低き事數寸に過ぎず、同じく樹木となれど、長短各異なるは、生れ付き定まればなり。極めて貧しき人も、我分の低きを安じて憂ふべからず、生れ付かざる富貴を羨むべからず。又、世には我れはどもなき人多し。我れより下なる人を見て、我分を樂しむべし。上を羨むべからず。又同じく人と生れたれども、長壽なる人あり、短命なる人あり。長さ

短き其品多くしておげて、數べがたし、富貴をきはめて萬の事心のまゝなる人も只命のみ心になはず。されども是れ又生れ付きて天命の定めれる所なれば、短しとて悲しむべき理にあらず。此理に達し天命を樂しんで身を終るべし。死ぬる時も苦しみ悲しまば、平生樂しめりともかひなかるべし。終りをつゝしむべし。たとへば松は千年を保ち、槿花は只一日のみ、長短各異なり。是れ生れ付きて定まれる分あれば、短きは長きを羨むべからず、各其分を安んずべし。

## 『木曾路記』の後叙

貝原益軒

木曾路は、かねて聞さしよりも道けはしからず、かけはしなど有れど、さは危からず。大井川、阿部川などの如き、洪水にてこえがたき所のうれひなく、又桑名、新江などの如くなる渡海のなやみなし。碓日峠より馬籠まで、信濃の内四十七里は、山中なる故坂多けれど、箱根の如くさかしき所なし。あるじのもてなし、他方にくらぶれば、まめやかにいと厚く、宿りも器もけからはしからず。山川のかたち、林木のこだち、諸州にすぐれうるはしくて、日々に目を喜ばしむ。行人少くして、往來稀なれば、道いそがしからず、心靜な

り。又人馬の力強き故、竹輿の内、馬鞍の上、おだやかにして、あやうからず。只十二月、正二月は、雪深くして行き難し。われ江戸に行くに、十二度皆東海道をゆきかへりしに、後のかへるさに、老の身は旅ふるも、又きぬべきたのみなくて、はじめて此道を通り侍りしに、思ひがけず善き道と知りぬ。其時日々に見聞せし所を、いさゝか後の思出にせんとて、道ゆきふりに人に尋ねて、書きしるし侍る。我一人の見聞はたのみ難ければ、漏れたる事違ひたる事多からんは、恨めし。後の見む人彼の事を知らば、其おちたるを補ひ、遠へるをたすけ給へ。寶永六年人日。

## 細川藤孝勅命に依りて田邊城を去る『藩翰譜』

新井白石

されども、入道藤孝さる古つはものにて、少しも騒ぐ氣色無く、宮津の城を棄て、田邊の城に盾籠り、かたき返しと待居たり。抑、此入道と申すは、弓矢打物とつて堪能なるのみにあらず、さらぬ小藝にだに達せずといふとなく、天下に雙なき多才多能の人なりけり。中にも敷島の道に深くすきて、古今和歌集の秘訣悉く此人に傳はれり。されば、此度我身うち死したらん後、



此道永く絶えなんとをかなしみ、城に籠れる初、相傳の書をも取集めて大内へたてまつるとて、

古へも、今もかはらぬ世の中に、心の種をのこす言の葉といふ一首の歌を添へて奉らせける。斯くて、丹波、但馬の軍勢雲霞の如く押寄せ、十重、廿重に取巻きて、火水になれど攻めければ、入道ちつともひるまず防ぎ戦ふ。かくては、此城なか〜一時に攻落さるべうも見えず。鳥丸の右大辨、勅使として大坂に行きむかひ、輝元、三成等に勅諭を傳へらる。夫れ和歌は我邦の風として、天地ひらけはじまりしより、此方百王の今に至るまで、其道長くつたはれり。然るに、今いにしへの事をも歌の心をも知れる人忽ちに亡せなんと、最も朝家の歎きなり。いかにもして彼の二位法印が恙なからんやうを謀るべしと宣べられたり。輝元を初として奉行ら謹んで承り、いそぎ早馬を立て、寄手の軍をといひ、もとより、入道は今を最期と思ひ切つて戦ひし程に、寄手たやすう引きて歸らんと叶ふべからず。此よしまた都に聞えしかば、三條西大納言、繪命をふくみて、丹後の國に下向ありて、すみやかに勅に應じ、其城を去るべしとありければ、入道畏つて、

普天の下卒土の濱、王土王臣にあらすといふ事なしと承る。ましてや此微賤の身、かくまのあたり寵渥の辱きをかうむるをや、さりながら、入道が年若き時ならんには、弓矢取る身のならひなり、敢て死を白刃の際に決して、深く恩を黄泉の下に感ずる事もあるべし。今は齡既にかたむきぬ。たとへ此戦に死する事なからんにも、餘命又いくばくぞや。されば、惜しかるまじき身なるが故に、私の名譽をむさぶつて、王命には背きまゐらすべきと答へ奉りて、やがて城を去つて、高野山にぞ赴きける。

將軍喪服の事 『折焚く柴の記』

新井白石

此年頃我仕へまゐらせし所も、上の待たせ給ひし所も、よのつね人にたぐふべからざれば、我心に思ふ所は申さずといふ事なく、上も又我申す處御心を用ひられずと云ふ事おはしまさず。上既になくならせ給はん後は、我たとひいふ事ありとも、誰かは又是をきくべき。さきに我仕への途も、今を限りとなりぬと申せしは、此事のためにてありき。されど、世のため人の爲深く遠く謀らせ給ひし所のいまだ行はせ給ふに及ばで、かくれさせ給ふ御際までも、承りし御事共は、我いかに其御志の程の行はれんことを思ひ

はかるべき事とこそ覺ゆれ。此等の外は、當代の御事助け參らする人も多くおはします。我しるべき所にもあらねば、此年の春仰せ蒙りたりし御日記の事等は、詮房朝臣に申す旨ありけり。かゝりし程に、十一月に至りて、當時は幼主の御事なれば、御服もおはします。程なく日光にも伊勢にも奉幣の御使あるべしなど聞ゆ。こはいかなる事にやと驚き思ひしかば、詮房朝臣に此事を問ひしに、大學頭信篤、七歳未満の人父母の服なしとて、かくは議し申したりけるなり。前に思ひし事の如く、當代の御事我しるべき所にあらねば、申すべき所にあらざるはもとよりなり。されど、此事に限りてはさてしもやむべき事かは、禮に七歳以下を無服の處とする事はあれど、七歳以下の人其父母のために服なきにあらず。ましてや、當時は天下の大統を承け繼がせ給ひて、億兆の君たらせ給ふ御事なり。いかでよのつね幼き者に例し參らすべきといひしかば、詮房朝臣、其由をもて信篤に問ふ事おはせしに、信篤答へて、我奉りて撰びし元祿の服忌令は、天下不易の制なり。いかなる者のかゝる事をば申すらむといふなり。老中の人々既に信篤の議によられぬ。信篤の答ふる所又斯の如くなれば、人々の心をめぐらさ

ん事いかにもかなふべからずとぞ、詮房朝臣もいひける。此事はそのかゝる所大なり。されど、此事をもて人々と議し申されん事然るべからず。某が如きは、一身の用捨國家の輕重をなすにあづからず。只某が議をもて人々には申し給へといひて、やがて其議をぞ參らせたる。

葉公の龍『駿臺雜話』

室 鳩 巢

ひかし、葉公、龍を好みて、其形をゑがゝせて、日夜愛翫せしが、ある時眞の龍これを聞きて、ゑがける龍をさへさやうに愛翫あるに、わが行きたらんに、は、ことなるもてなしにも遇ひなんと思ひ、窓より顔をさし入れたれば、葉公大きに恐れてにげまごひけり。今東西兩都の儒者を見るに、多き中には正學の志ある人もあるべけれども、大かたは自ら尊大にして師儒と稱しつゝ、我こそ聖賢の道を好むと言へど、たゞ論說をつとめ、著述を衒ひ、是をもて世に傲り名を釣るに過ぎず。もとより道に實得の功なければ、もし眞の聖賢にやは、目をかへして相見んとぞ覺え侍る。しからば、日頃聖賢の道を好むといふは、葉公が龍を好むに同じかるべし。愛嬰が仲尼を毀り、蘇軾が程願を惡むにて、考へ見給へ。ひとりば齊の賢人、ひとりば宋の名臣に

て候へども、それさへかくの如し、況や二子に及ばざるものをやざれば、漢の楊雄、道徳を論じ、太玄を著し、一代の儒といはれしかども、一旦賊莽に臣としつゝかへて、節義を失ひしぞかし。たとひ莽が世に生れずして此事なくとも、是等の學問にては、もし孔孟にあうて節義の守をもて責められなば、必ずにげさけぬべし。然らば、太玄五千文、皆虛文にあらずや。後世の子雲ありて我をしらんといへど、後世莽が太夫ありて知音たらんかし。この故に、言論のみを聞きてその實迹を見ざれば、世話にはたけ水鏡といふ如く、仕かたばかりにては人信じがたきものなり。はや三十年前の事にて侍る。加賀の國に杉本の何がしとて、ひとりの微賤の士ありき。翁その人と久しく相知りしが、其子九十郎といふもの十五歳の時、父はあづまへ行役しける。其跡に、年輩同じ程なる近隣の子と、園藪のうへにて口論しけるに、九十郎こらへず、刀を抜き、相手を一太刀きりしを、かたへの人取りさへけり。さて、其事應に達して後、相手の創療治さすべしとの事にて、其間九十郎は官長の家に預り置きしに、いさゝか臆したる氣色露はどもなく、言語ふるまひの落つきたるは、中々年におよばぬやうに見えける。日を経て相手終に創

にて果てければ、九十郎も切腹するに議定しける程に、その前の夜主人名残を惜みつゝ、酒肴いろ／＼用意してもてはやしけるに、九十郎母への文などしたゝめ置き、さて主人にくはしく謝詞を述べ、此程附居たる家人へも、それ／＼にねんごろにいとま乞して、さていひけるは、面々へ名残も惜しく候へば、こよひは明くるまでも語りたく候へども、あす切腹の時ねふたく候ては、いかいと存じ候へば、先へふせり候べし。面々は是にてゆるゆると酒すゝめられ候へど、奥へ入りて高聲して寐ぬるを聞きて、跡に居たりし人々感じあひけるとぞ。又の日つとめてよき程におきいで、沐浴し衣服あらためつゝ、用意心靜にし、其後切腹の席へいで、檢使に一禮し、こゝろよく切腹しぬ。其有様從容としてやすらかなりし、いかなる勇烈老功の士たりといふども、是には過ぎまじと見ゆしとて、其場には有合せし人々、年を経て後までも語り出して、涙おとさぬはなし。此事おこりし始に翁彼が父のもとへ文やりてしらするとて、九十郎たどひ切腹するに及びたりども、此程のおどなしにては、未練なる事あるまじ。それは心安く思ふべしといひつかはしけるに、後に聞けば、父其文を人に見せて、かくはいひ

て來たれども、わらべに灸するに、前には人にすかされて、思ひの外におど  
なく見ゆれども、火を取りてむかへば、そのきはになりて俄に泣出して、  
前の言葉には似ぬものをぞかし、わが子も未だ年にたらねば、いさぎよく切  
腹したるといふたよりを聞くまでは、心もとなく思ひ侍るといひしと云  
古人のいふ如く、此父なくば此の子あらじと思ひ侍りき、さて此事を申出  
し侍るは、九十郎がかくばかり、歳にも似ずしてけなげなるを、世に聞傳ふ  
る人もなくて果てなんは、あまり不便に候へば、申す事にて侍る。その上、今  
翁をはじめ、言論文字にて古人のまねをして、その實のあらはるゝ時に至  
りて、日ごろのあらましと違ひありなんは、是ぞ誠にわらべの灸なるべし。  
多年學問して儒者といはるゝ身にて、かの童蒙無知の九十郎が覺悟にさ  
へ劣るべき事かは、いとほづかしき心ならずや、諸君も常にこゝを察して、  
よく省み給ふべし。

松禪院の老奴『雲萍雜誌』

柳澤淇園

此叡の山なる飯室谷の松禪院に、ひとり老爺あり。坂本の産にて、農夫の子  
なりけるが、父母におくれて、十四歳の時よりこの寺に住居し、今年九十六

歳なりとて、予其の者にあへり。せい高く、耳目健にして、齒牙かけたる所な  
く、白髪にして、頰骨あれいとたくましくして力あり。他へいで、他の物を  
食はず、京へいづるには、飯を握りて腰につけ尋常の人の爲る二日の用を、  
ひと日にたしてもどりければ、寺にはなくてかなはざる人ど、いたはりて  
使ひけるに、院主三百貫目の借財ありて、移轉するとあたはざるを深く歎  
きければ、老爺わらひながらに、こゝに今二とせ辛抱したまへかし、われら  
働きて、其借財をつくのひすまして、移轉させ申すべしと云ふ。院主心のう  
ちに、何をかはいふと、さみしおもへど、老人の詞なれば、たのむといひしは  
かりにて、きのふと過ぎけふとくらして、年月を送りけるが、此老爺それよ  
りして、不毛の地には物を栽ゑ、また山林の下草を刈りては、市に賣り、夜は  
繩をなひ筵を織り、あるは人の爲に雇はれて、晝夜寢食を忘るゝばかり働  
きければ、三とせがうちに三百貫目の借財をすませ、院主を太秦に移轉さ  
せけり。院主移轉の時、かの老爺が働きの莫大なるを謝せんが爲に、伴ひて  
安居さすべしと勸むれども、吾等は此山に八十年も住みなれたれば、他へ  
行くの志なしとて、終にゆがすなりぬ。その後院主多くの謝物を贈りたれ

さも少しも受けずして云ひけるは、院主は人を濟度するの役なり、物なければ教化しがたし、我等財を持ちたりとも、人の教化も出来ざる身に、不用の財はありて益なし、財の用は人にありて、不用の者に入らざる者なり、身を終るまで食料だにあらば、何をかその餘を求むべきとて、かくて又後住にもいとねもころにつかへしとぞ。

### 第參節

#### 雅文

附古書の解釋及び語法の研究

歌道刷新の目的を以て古文學の研究を首唱したる下河邊長流、僧契沖は、同時に散文の復古を計りたる雅文家の東道となれり。但し、此の二人及び當期の初中葉に出でたる國學者は、自ら雅文を綴るを旨とせしに非ずして、専ら心を古歌、古文の解釋に委ね、間作る所の文やがて擬古の躰をなせるもの多きを記憶せざるべからず。

長流、契沖の二人、大阪にありて國學の開發に従へると同時に、江戸にありて同じく古文學の註釋に力めしものありき。之を北村季吟とす。季吟(二二八八—二三六五)初は京師に住みて松永貞徳に俳諧・和歌を學び、後幕府に召されて江戸に移り、歌學所とありて再昌院法印に任せらせぬ。博聞強記にして、著書五十種に餘れり。『源氏物語湖月抄』、『枕草紙春曙抄』、『徒然草文段抄』、『土佐日記抄』、『伊勢物語拾穗抄』、『大和物語抄』、『萬葉集拾穗抄』、『百人一首拾穗抄』、『和漢朗詠集集註』の十種は幕府に上れるもの、説明精細にして後世を裨益するところ多し。季吟また詞章に巧ならざるにあらずと雖も、古書の註釋は蓋し此の人の名を以て不朽ならしむるものなり。寶永二年六月十五日、年八十八にて卒しぬ。當時徳川光圀の編纂せしめたる『大日本史』及び『扶桑拾葉集』は、また國文學

興隆の機運を助成したるものなり。さて、我が國文學の復興はかくの如くにして其の端緒を開きしが、正徳・享保の交、荷田春滿の出づるに及びて、俄に旭日の勢を現すに至れり。春滿(二三二八—二三九六)は京都稻荷山の祠官にして、通稱を羽倉齋宮といへり。人として爲り謹嚴にして、氣節あり。夙に國學の替廢を慨きて、眼を國史・律令に注ぎ、心を古文・古歌の研究に潜め、専ら古道の恢復を以て己れが任させり。國史神代の卷に『萬葉集』に就きては、特に其の創見を見るべし。晩年國學校を伏見に創設せむと欲し、胸算粗成りしが、未だ果さずして病歿せり。時に元文元年七月二日、齡六十九なりき。甥にして嗣子たりし、在滿(二四一一)歿、家學を受けて亦制度・律令に通ぜしが、別に妹蒼生子と共に歌文をも能くしたり。在滿に『白猿物語』、『長月物語』の作あり。

春滿の著書は、其の説の未熟なるを耻ちて歿前に焚棄てしかば、現に世に傳はるもの甚だ少し。其の門に碩學加茂眞淵出で、國文學上に偉勳を樹て、眞淵の門より萬英一時にあらはれて、益國學を天下に普及せり。就中、本居宣長は註釋に心を盡し、兼て村田春海・橋千蔭等と共に雅文を以て當時の文壇を風靡したり。

本居宣長(二三九〇—二四六一)は、號を鈴の屋といひ、通稱を舜庵、後に中衛といへり。伊勢松坂の人にして、初め醫を業とせしが、年廿七の時、契沖の著書を見て古學に志し、既にして眞淵の冠辭考を讀みて更に奮發する所あり。寶曆十一年眞淵の松坂に來りしを機として、其の門に入りぬ。爾後醫業の傍、専ら心を古典の研究に委ね、日夜勵精、暫くも懈らず、終に國史・國文に就きて前人未發の見を建てたり。又、我が儒者の

其の所從に心酔して自國を蔑如せるを慨き、百方辨難以て國牀の發揮を力めき。かくて名聲次第に隆起し、縉紳は延いて教を請ふを榮こし、士庶は趨いて道を受くるを譽こし、業を成し名を擧ぐる者甚だ少からず。晚年紀州徳川家に仕へ、眷遇頗る渥かなりき。享和元年九月廿九日、齡七十二にて歿せり。男春庭(二四八八歿)、養子大平(二四九三歿)並に父の遺業を繼ぎて家聲を墮さざりき。宣長の著述數十種、古歌、古文の解釋には『古今集遠鏡』『歷朝詔詞解』あり。『源氏物語玉の小櫛』は彼の書に於ける諸註の醇雜を批判せるもの、『萬葉集玉の小琴』は此の集に關する諸家の説を評論せるもの、共に卓説多し。音韻の學に就きては『漢字三音考』『字音假字づかひ』『地名字音假字づかひ』等あり。其の他なほ『直毘靈』『神代正語』『玉くしげ』『初山踏』『美濃の家裏』『草庵集玉箒』『音笠日記』『玉

賀津滿』『鈴廼屋集』等あり。就中、宣長の最も心力を盡したるを『古事記』の註釋『古事記傳』とす。『古事記傳』は、宣長が三十五歳の時に稿を起し六十九歳にして完成せるものなり。されば、其の間、年を閲すること三十五年、難義の考證に至りては、寢食を忘るゝこと數日に及べるともありといふ。卷數すべて四十四。考證の精確なる能く千古の疑團を氷解するに足れり。詢に我が邦有數の大著述にして、史學上は更にも言はず、又文學上及び語學上の至寶たり。宣長別に國文の法則を研究して、『詞の玉緒』『紐鏡』を作りぬ。是れより先、契沖、眞淵、富士谷成章等また多少眼を語學の研究に注ぎたり。雖も、我が語法に就きて系統的の著述ありしは、宣長を以て嚆矢とす。後世に於ける文法書は、實に其の基礎を宣長に負ふところ多し。

宣長の文章は『鈴廼屋集』に見えたるもの、巧緻なる『直毘靈』『玉賀津滿』等に載せたるもの、澹泊なる共に雅文の好模範とすべし殊に『玉賀津滿』は著者一代の隨筆にして、其の才學の時輩に卓越せるを見るに足る。和歌にも亦誦すべきもの多し。世人春滿眞淵宣長を併稱して國學三大人と云へども、宣長の學殖識見は遙に他の二人を凌ぎ、勉強成功の三點亦日を同じうして語るべからず。

村田春海(三四〇六一二四七一)は江戸の商家に生れ、父春道兄春郷と俱に縣居門に遊びて才人の名を得たり。性豪放にして治産を屑とせず、家道漸く衰へむとせしが、尙ほ志を屈せずして學問に精勵し、終に詞章を以て名を成すに至れり。其の作る所の雅文には、雄渾なる議論あり、流麗なる紀事あり、概ね波瀾起伏に富み、擒縱抑揚の自在なる、大に一般

國學者の製と異なる者あり。蓋し、作者漢學にも通曉せしを以て、文則を彼の唐宋大家に取りしに因り、又推敲工夫一措辭をも忽にせざりしに因れり。是に於いて、時人春海を推して徳川時代第一の能文家と稱揚するに至りぬ。春海又和歌に巧なりしが、強ひて縣門の古調を襲はず、寧ろ自然に任せて平易なる詞をも採用せり。歌文俱に『琴後集』に收めらる。琴後翁は自家の號、別に錦織齋ともいへり。文化八年二月十三日歿しぬ。時に年六十六。初め白河侯の知遇を得て月俸を受け、晩に京都なる妙法院一品親王の寵を蒙りき。著書は家集の外に、『歌がたり』『時文摘紙』『錦織雜記』『和學大觀』『五十音辨誤』『椿太詣記』等あり。門人清水濱臣(二四八四歿)亦雅文を能くして師の衣鉢を傳へたり。

春海の親友にして、而も文壇上其の好敵手たりし者あり。之



を橘千蔭(二三九八―二四六八)とす。氏は加藤、號は芳宜園又  
 朮園(うけらが園)江戸の人にして家世々與力なりき。父枝直  
 と俱に眞淵に師事し、久老、宇万伎等と交れり。資性敦厚にし  
 て物と競はず、善く偏急ある琴後翁を容れて、終始其の敬愛  
 する所となりき。千蔭最も歌文に長じ、殊に其の雅文は輕妙  
 にして情致に富み、之を春海の作に比するに、溫柔にして逼  
 らざるどころ、酷だ其の人と爲りに類す。家集を『うけらが花』  
 といふ。別に『萬葉集略解』『香取日記』等の著述あり。『略解』最  
 も世に行はる。千蔭多能にして狂歌、狂文をも作り、丹青を嗜  
 み、又筆札に巧なりき。就中、後者は其の雅文及び和歌に次ぎ  
 て世の歡迎する所となり、墨帖の刊行を促すに至れり。文化  
 五年九月二日、享年七十四にて歿す。春海、千蔭等の江戸に鳴るや、上田秋成大阪に出で、亦文章を

以て一時に振ひたり。秋成(二三九三―二四七〇)通稱を東作、  
 號を鶉廼屋又餘齋といへり。初め醫と儒とを學び、加藤宇萬  
 伎の大阪に祇役するに及び、之に就きて歌文を修め、遂に一  
 家を成したり。其の文を作る、頗る迅速にして法式に拘らず、  
 興到れば一日輒ち數十篇を出す。故に、まゝ流暢を缺く嫌あ  
 り、れども、莊大にして氣力あると、當時第一の稱あり。中年の頃、  
 火災に罹りて資財、書籍を失ひしより、居を定めずして京師  
 の間に飄蕩せしが、晩に世塵を京都南禪寺中に避けたり。平  
 生狷介、疎懶にして多く人と交らず、只小澤蘆庵、伴蒿蹊數輩  
 と親しかりき。一代の奇行少からず。文化七年、齡七十八(?)に  
 て歿せり。著書に『冠辭考續紹』『萬葉集目安補註』『校補古今  
 集打聽』『靈語通』『伊勢物語古意考』『よしやあしや』等あれど、  
 其の文才の非凡あるを徴すべきものは、『兩月物語』『くせ物

語』及び家集『藤篋冊子』なり。但し三書共に語格上の過失多きは讀者の留意すべきとす。秋成別に『諸藝聞耳世間猿』等の戯作ありて、其の滑稽の才は太田南畝をして推重せしめたりといふ。

寛政の前後は最も國學隆盛の時期なりしかば、詞章・解釋及び語學に名を得たる者尙少なからず。其の尤を擧ぐれば、楫取魚彦(二三八二—二四四三)、伴蒿蹊(二三九三—二四六六)、富士谷成章(二三九八—二四三九)、其の子御杖(二四二八—二四八三)、加藤宇萬伎(二三八一—二四三七)、荒木田久老(二四〇六—二四六四)、尾崎雅嘉(二四一五—二四八七)、藤井高尙(二四二四—二五〇〇)、松平定信(樂翁、二四一八—二四八九)等あり。此の人々の著書には、雅文の集に蒿蹊の『閑田文章』、高尙の松の舍集『松の落葉』、定信の『花月双紙』等あり。語法の書に魚

彦の『古言梯』、成章の『挿頭抄』、脚結抄、本居春庭の『詞の八衢』等あり。その他、谷川士清(二三六七—二四三六)の『和訓栞』は辭書として、堀保己(二二四〇—二四八一)の『群書類從』は一大叢書として最も記憶すべき者、則ち前者は主として語學界を益し、後者は治く文學・史學界を利したり。世稍下りては、考證家伴信友(二四三三—二五〇六)、類書家高田與清(二四四三—二五〇七)、神道家平田篤胤(二四三六—二五〇三)同時に出で、三大家の稱あり。歌學者橘守部(二四四一—二五〇九)、語學者僧義門(生歿年未詳)等亦其の頃の名家たり。此等は皆歌文を能くせざるに非ずと雖も、おの／＼別に心を専らにする所ありて、其の純文學に於ける貢獻に就きては、特に記すべき程のものあらず。但し、與清が水戸家の命を以て編輯せし『八洲文藻』は、徳川光圀の撰『扶桑拾葉集』の後を繼

きて古來の名文を採録せるものにして、『拾葉集』と共に雅  
文研習者の参考に資すべきものなり。

九月はつかあまりに津の國難波へ行く人を  
送る序『賀茂翁家集』

賀茂真淵

わかねさす日高みの國よりもそなた天雲のむかふすきはみはむさしの  
遠のみかせにして、とほく見あきらめたまひしらぬひのつくしの國より  
もかなた、かげろひの日の入る國かけては、難波の國におさへの城をねさ  
て、おさへ守らしめ給へれば、谷ぐくのさわたるかぎり、まつろはぬくまわ  
んななかりける。茲に物部の八十のまぢ君だちの中に、その難波のみこと  
もちをぬらみて、日臣命のはつこ、大伴の宿禰をまけたまへれば、君が世の  
長月のはつかまりになんまかりまうし、たまひける。しかれば大殿に百  
の司をつせへて、うたげをまけ、馬のはなむけをなん賜はるに、おまへにめ  
してのたまはすらく、今はよ汝宿禰をまけつるなり。あれはたむださをら  
ん、あそばへをらん、よく行きてよく治めよとて、しるしのつはものたまは  
り、物かづけたまへり。また歌人をしてうたはしめ給ふことは、ますらをの

行くどよ道予おほろかに思ひてゆくなますらをのともてふ、いにしへの  
天皇のおほみ歌になんありける。打返しうたふ聲は、ふけゆく秋風にたぐ  
ひ、かさかへししらぶる音は、有明の月にすみわたるを、宿禰をはじめて、は  
るかに聞くなる伴のますらをまで、かたじけなき涙をぞおとすなる。さる  
は青波のかしこきをわたるとも、赤き心をもてつとめざらめや、すなはち  
むら鳥の朝だちゆくさまは、千々のますらをの袂にもみちをおり、百のふ  
つまのあなみに霜をうがち、青旗のかつらは千里の浦風になびき、しらぬ  
りのぬでは五十のうまやにゆらぎ、箱根のねらの岩がねふみさぐみ、大井  
川の川とつゝみなく、淡海のうみの平らかに、津守の浦のいゆきつもありい  
たり給ひなん、かくいたりては、西の海つ道南の海つ道山のかげともなる、  
日のぬきなる、さはなる國のよきもあしきも、立田路よりみつの濱より、見  
はらし聞きあきらめ給はんこと、まこと、大津のをしき丈夫のまけな  
りけり、こゝにしてこのまけのおもきをしれ、ば、わたくしのわかればか  
ろしとせざらんやも、すなはち古きしらべをうたひていはく、  
大伴の 名におふ君を いく世経て 今まちうらん みつの濱松

古き名どころを尋ねる事「玉かつま」本居宣長  
 ふるき神の社の今は絶たたる、又絶たざれども、さだかならずなりぬるな  
 ど、いづくにも多かるは、いとかなしきわざなり、神祇官の帳にのれるな  
 は、かけてもさはあるまじきわざなるを、中ころの世のみだれに、天の下の  
 よろづの事も、古へのおきても、皆みだれにみだれ、たえうせにたえうせに  
 たる、萬づにつけて、いとものゝかなしきは、亂れ世のしわざなりけり、さ  
 を今の御世は、いにしへにもまれなるまでよく治まりて、いとものめでたく、  
 天の下榮えにさかゆるまゝに、よろづに古へをたづねて、絶えたるをおこ  
 し、れとろへたるを直し給ふ御世にしあれば、神の社どもは、殊に古へに立  
 かへりて榮ゆべき時なりけり、然あるにつけては、絶たたるは跡をだにさ  
 だかにたづねまほしく、又今も有りながら、さだかならず疑はしきをば、よ  
 く考へ尋ねて、たしかにそれと定めしらまほしきわざになむありける、夫  
 には神の社ならぬも、いにしへに名あるところ、歌枕なども、今はさだ  
 かならぬが多かるは、かゝるめでたき時世にあたりて、尋ねおかまほしき  
 わざなり、かくて神の社にまれ、御陵にまれ、歌枕にまれ、何にまれ、はるかな

るいにしへのを中ころとめうしなひたるを、今の世にしてたづね定めむ  
 とは、大かたたやすからぬわざになむ有りける、其ゆゑをいはひには、まづ  
 此よるき所をたづぬるわざは、たいに古への書どもを考へたるのみにて  
 は、知りがたし、いかにくはしく考へたるも、書もて考へ定めたるとは、其所  
 にいたりて見聞けば、いたく違ふ事の多き物なり、よそながらは、さだかな  
 らぬ所も、其國にては、さすがに書きもつたへ、かたりも傳へて、まがひなき  
 事もあり、さればみづから其地にいたりて見もし、その事よくしれる人  
 にとひきゝなどもせでは、事たらず、又たゞ一たび物して見聞きたるの  
 みにても、猶たらず、ゆきて見聞きて立かへりて、又ふみどもと考へ合せ  
 て、又々もゆきて、よく見聞きたるうへならでは、定めがたかるべし、さて又  
 其のところの人におひてとひきくにも、心得べきとくさぐさあり、いにし  
 への事をあまりたしかにしりがほにかたるは、おほくは書のかたはしを  
 なまゝに、にかむがへなぞしたるものゝ、おのがさかしらも、さだめいふ  
 が多ければ、そはいと頼みがたぐ、なかゝのものぞこなひなり、又世に名  
 高き所なぞをば、外なるをもしひておのが國おのが里のにせまほしがる

ならひにて、たいいささかのよりせころめきたるをも、かたくとらへて、しひてこゝぞといひなして、しるしを作るたぐひなど、はたよに多きを、さる心してまぜよべからず、ふみなどは、むげに見たるとなき、ひたぶるのしづのを、おぼえぬてかたることは、しり口おはず、しぜけなく、ひがどのみおほかれど、其中にはかへりてをかしき事もまじるわざなれど、さるたぐひをも心とめてきくべきわざなり、されど又むかしなまゝの物しり人などの尋ねきたるが、ひがさだめして、こゝはしかくの跡をなど、をしへおきたるをきくをりて、里人はまことにさることゝ信じて、子うまごなせにもかたりつたへたるたぐひもあんなれば、うべくしくきこゆるとも、なほひたぶるにはうけがたし、又みづからそのところのさまをゆき見て、さだむるにも、くさく、こころうべきとせもあり、おほかた所のさまかみさびて、木立しげく、物よりなせしたるを見れば、こゝこそはとめとまる物なれど、それはたうちつけには頼みがたし、大かたにならぬ所にもふるめきたる森はやしなどは、多くあるものなり、木だちなど二三百年もへぬるは、いとく物よりて見ゆるものなれば、ふるく見ゆるにつきても、

たやすくは定めがたきわざなりかし、村の名山川浦磯などの名に、心をつけて尋ねべし、田どころなどのあざなどいふものなせをも、よく尋ねべし、寺の名に古きがのこれるが、よくあるとなり、しかはわれども、又すべて名によりて誤るともあるわざなり、又寺々の縁起といふ物、おほかた例のはうしのそらごどがちなれど、其中にまれくにはとるべきともまじれるものなれば、これはたひたぶるにはすつべきにあらず、古きあとは、中ごろはうしごもの國人をわざむきて、佛ごころにしなしたるが、いづれの國にも多ければ、はとけせころをも其心してたづぬべし、ふるき寺にはふるき書き物など有りて、古き事のこれるおほし、むげに尋ねべきたづなき所も、思ひかけぬところよりたしかなるしるしの出来るやうもあれば、いたらぬくまなく、よろづに思ひめぐらして、くはしく尋ねべし、かくて尋ねたりと思ふところも、なほたしかには定むべからず、よにさるべき人の定めおきつる所などは、ひがさだめなるも、つひにそこにさだまりて、後のまぜひとなるわざなりかし、そもく此くだりは、名所をたづねるわざのみにもあらず、よろづのかむがへにもわたることゝもありぬべくなむ。

初冬時雨といふことを題にて『鈴廼屋集』本 居 宣 長

神無月のはじめ、物へゆきけるに、日いとみじかきころ、やゝとほきところ  
 にし有りければ、いそぎつれど、かへさはとく暮れにけり、夕月の影に、玉さ  
 の霜のところせくおきわたしたるが、さら〜と見わたるなど、中々を  
 かしき冬枯の野へのけしき、やみならましかば、くちをしからましと思ふ  
 にも、入るかたちかくかすかなるひかりの、いとわかぬこゝちするに、空さ  
 へにはかにくもりて、山のはならで月もかくれ、いみじくらくなりて、風  
 あら〜しく吹きぬるは、げにさだめなき此ころの空のけしきかなと見  
 るには、はしたなくうちしぐれきぬれば、あしをそらにはしりかへるほど、し  
 どいにぬれぬ、何とはわかぬと、いと大きな木のたてるを見つけて、しば  
 しのかさやせりと頼む陰さへ、いたくちりすぎにたれば、雨たまるべくも  
 あらぬぞ、いとわりなきわざなりける。しばしのほごになどりもなく晴れ  
 ぬれど、月はやく入りにけり。

清水濱臣がもとへ『翠後集』

村 田 春 海

よろづの事、いとほかなき業にても、物の上手はおのづからに高き心しら

ひあるものにて、なま〜の人は却りてうたがふふしあめり、そのまだし  
 ききはの人には、とみにわきまへがたからんこそ、まことのいたり深きに  
 はわなれ、かの雨夜の物語に、木の道のたくみと手かくことうつしゑの上  
 との心ばへをいへるなどは、よく其心を得たるものなり。女房のはかなき  
 筆すさみとはいへど、こと加ふべき事なんあらざりける。今いにしへの歌  
 の、のせやかにみやびかにしらべゆるやかにたけあるを、あぢはひ少くて  
 事たらはずとして棄て、後鳥羽土御門の御時などの、いやしげにさしす  
 ぎて、偽はりたる巧ある歌を、却りて前にも後にもたぐひなしなと思ふは、  
 物の上手の、高き心しらひある事をば思ひもわかぬ、よの常のまだしきさ  
 はの人の心とやいはん、かくいふは、わが私の心をたて、いふには侍らす、  
 公のことわりなり、今より後、百年をすぎ侍るとも物の心得たらん人のい  
 で来ば、必ずわがあげつらひをば改むまじうこそ、かく思ひ定め侍るにつ  
 けても、かの家づと(美濃の)のひがことこの人まぢはしなるわざなれば、さゝ  
 ぐりと名づけて物し侍り、うちかへし讀みたまひて、なほわが思ひもらせ  
 ることもあらんをば、こゝろみにこと加へたまひてよ、こは人のさがいふ

を好むには侍らず、わが縣居の歌のをしへの、いと高き心ばへある事を、心  
 あひたる人々の思ひまどはざらん爲にとて、なすわざになん、鈴の屋の翁  
 さばかりすぐれたる人なるに、又いたくひがみたる事多きは、をしむべき  
 わざにこそ侍りけれ、歌のあげつらひのみにも侍らず、わが國の古の道な  
 りなど、いかめしくいひつゝくる事の侍るも、いと心得がたきことに侍り、  
 さる事いふにつけては、ひじりの道をも佛ののりをも、口さがなくいひお  
 としめなぞするは、いとあるまじき事とこそおぼえ侍れ、さてわが國の古  
 の道といふ事、いかなるよみに出でたるにか、おのがふみよひと多からね  
 ばにや、いにしへのふみにさる事しるせるものは、未だ見侍らずなん、恐ら  
 くは、私の心に作りかまへて、いひ出づるにこそ侍らめ、これをもその古に  
 より所なきよしを、あきらめいひて、初學の人などのためにと、思ひを侍  
 れど、よく思ひめぐらし侍るに、こは事の心とほらぬとしるければ、心をた  
 ひらかにして思はん人は、誰もわきまへぬべければ、おもひやみて筆おこ  
 し侍らず、歌の事は、ようせず思ひまどはん人もありぬべければ、言はで  
 は止みがたうこそおぼえ侍るなれ、なほまのあたり聞ゆべき事も多し、い

とま得たまはんをりに、むぐらふの露ふみわけ給ひなんや。

初鴈をさく辭『うけらが花』

橘 千 蔭

桐の葉の 一葉散りそむるゆうべ、獨り高き屋にのぼりて七つをの小琴を  
 かきならしつゝ、秋の風のことばをうそふき出でけるをりしも、遠つ人初  
 鴈がねの聲かすかにきこゆるにおどろきて、しばしひきさしつゝ、見さく  
 れば姿は雲路になん消うせぬる、いでや白雪のふるとしよりしも、はねな  
 らはしつゝ、かげろふの春立ちそむるあした、日影うらら〜とうち霞める  
 に、軒近き簷にねぐらしめつる鶯の、まだ片なりなるうひひるにはひ出せ  
 るより、笠にぬふてふ花のかをりみてる枝に來るつゝ、ほこりかにさへつ  
 るは、めでたき物から、雲にたぐへし櫻も散過ぎて、青葉しげき木の間を立  
 ちぐゝ聲のむくつけきには、待たるゝ物は、といひしに引きたがへてぞお  
 ぼゆるかし、池のふぢなみ夏かけてには、はる比、はとゝぎすの、それかあら  
 ぬかどたせらるゝ、一聲より、花橘のゆくりなく、香には、はる曙、あり明の  
 月のさやかなるみ空に、さだかに名のりて、過ぎゆくは、さらなり、小さめそ  
 ぼふるゆふべ、物思ひにいをねすして、更過ぐる夜は、に、をち返り鳴くを、誰

やし人かあはれとおもはざらむ。しかはあれど、山かたつけるわたりには、  
 こちたきまで飛びかひつゝ、梢にしもおりゐて、高やかに鳴きせよめるな  
 どは、今一聲のといふべくもあらすうれたきや。そもくゝ鴈は、常世の國を  
 や出でけん、三越路よりや來ぬらむ。ある時は真木たてるあら山のあした  
 の霧にむせびあるときはみるめ刈るやしはぢの夕の浪をつばさにつけ  
 て、草の枕だに結びあへず、天路はるかにおもひあがりて、夕暮の雲のはた  
 てに、聲はを舟こゝ唐ろにかよひ、姿は薄墨にかけける文字に似て、一つら過  
 行きつゝ、遠かたの田づらに暮ちくるさまさへおほせかにして、其時しも  
 萩の葉におとなふ風はぎがぬに亂るゝ露くまなきよはの月染めかくる  
 木々のもみぢ、千たび八千たび打すさふ砧の音おしこめてあはれなるを  
 りに逢ひぬるが、限りなくめでたくなん。また別れていぬる春べには、花を  
 見捨つるなぞとがむれれど、しづけかるみ山の花をつばさにしめんとて、  
 都の空をいそぐならんとおもへば、そもはたにくからずこそ、鴈よくゝ。な  
 れこそはわがおもふぞちなりけれ。  
 われもいざ 秋をあはれふ 友どちの つらにはもれじ 天つかりがね

初秋『藤篋冊子』

上田秋成

月あかき夜を誰かはめでざらん。ふん月望のこよひ庵を出てわづかに杖  
 をひけば、鴨の河づらなり。雨ふらぬはせなれば、月は流れを尋ねてやすむ  
 らん。おとをしるべにとめくれれば、むべも清しとて、人々手にむすび、かひを  
 そぼりなぞして遊ぶ。風高く吹き、雲消え影さやかにて、何をか思ふくまの  
 あるべき。月見れはそゝろに物の悲しきぞとは、竹の中より生れ出し貌よ  
 人の天にいまやの別ををしむにこそ。泉漲れども煮るべき物をもたらず、  
 酒もとむる家もちかからずとて、たゞさしあふぎてかたり話すとはなし  
 に、大かたの人は往しへの跡につきて、八月のこよひ文作り歌よみ、杯の流  
 のまゝにあそぶよ。さはをかしき一ふしをはらみなしては、夜よしとのみ  
 思ひたのめしに、おしたより雲立まよひ、野分立つ物の音して、村雨さどふ  
 り通りし跡の雲まより、さし出たる面輪嬉しけれど、さすがに思ふにたが  
 ふとのあるには、はとばかりながめすてゝ、さしてめし、閨戸のすさまより、物  
 にさはらでさし入りたる光は、目さめ心もすむらんかし。さてしも君まつ  
 ばかりに、夕とゝろさして居たちつゝ、あらんも、おひなう苦しかるべき時



はいつにもあれ、よひあかつきをもち、垣ねの萩の葉のさやぎ、草深き  
虫の音のみやは、朧夜の花の木がくれ、時鳥一二聲の音づれ、片山里の門涼  
みに、笠三つ四つ飛びかふには、命ものばへなんこ、ちもせらるべき、雪霜  
のしらへ、しき光などは、あまりにすすましとやいはん。しらぬ浪路の舟  
をまりして、管のすきもる影は、いかにわびしからんものぞ。もろこし人の  
友ぞち舟うかべて、さかしき山の岸陰に、物のねかなしく遊びたらんには、  
さすらへずばいかでかゝる境の秋を見るべきとおぼすらん、罪なくて  
さるわたりまでをどひとりこち給ふと、いづれ都府樓近きにもたれこめ  
いませし君こそは、月をかなしきものとも打守り給ふらめ。老が家をうし  
なひ、人をもさきだて、世に落ちはふれよるほひつゝ、命生きたらんを、しば  
しにてもと云ふ人々に扶けられて、めしくあなづらしき身の、月見て遊  
ぶは何心や、歌よむとはなしに、

月こそは、影も身にしめ、初秋の、さよ風すし、かもの河つら  
月見つゝ、夜の更行けば、久方の、天のかはらも、河たがへして

#### 第四節 小説

小説は殆ど此の時代の文學の大半を領有するものなり。寛  
文の頃諸の文學緒につくに當りて、既に假名艸子といふも  
のありき。假名艸子は漢籍佛經又は我が古文學等に見えた  
る珍説異聞を翻案して、娛樂に供すると共に、一般の智識を  
啓發するを目的としたるものなり。故に、其の作大抵教訓六  
七分に世事三四分を加へ、重に一廉の學者を以て世に許さ  
れたるものの一時の手すさびに成れり。鈴木正三(二二三九  
―二三一五)、山岡元隣(二二九一―二三三三)、淺井了意(二三三  
―二三三三)の如きは、即ち當時の作者の主なるものにして、著書に  
は正三の『因果物語』、元隣の『誰が身の上』、『小さかつき』、了意  
の『御伽婢子』、『浮世物語』等を最も出色とす。  
かくて、天和年間に至り、世態を寫すを以て旨とせる浮世草

子といふもの世に行はれぬ。蓋し、假名艸子の中にも、早く二三の書は世態の描寫に着眼して筆を染めたるも見ゆれど、一般に浮世草子として識認せられたるは、井原西鶴の著作に肇まる。浮世草子はまゝ、教訓若しくは怪談に渉るものあり。雖も、大方は人情の描寫を主としたるものなり。其の作者には、西鶴の外、八文字舎自笑(二三二六―二四〇六)、江島屋其碩(二三二七―二三九六)等最も名ありしものなり。西鶴(二三〇二―二三五二)は大阪の人なり。西山宗因に従ひて俳諧を學び、嘗て住吉の社頭に於いて一日に二萬三千句を吟ぜしを以て、二萬翁或は二萬堂の稱あり。其の著作には『二代男』『一代女』『五人女』『武道傳來記』『日本永代藏』『世間胸算用』『俗つれぐ』等傑作を稱せらる。其の筆鋒銳利にして、能く人生の秘奥を穿つところ、優に本期文學の一大家たるに足るものあり。但し、其の傑作中には、寫實の極、文辭猥褻に涉りて讀むに堪へざる節多し。元祿五年、五十一歳にて歿しぬ。西鶴の風牀を傳へて亦能文の譽を得し者に、西澤一風・錦文流(共に寶永享保頃の人の二人ありしが、其の所長は寧ろ淨瑠璃に在りて、小説家としては聊か後れて出でたる自笑。其碩に其の名聲を遜りき。但し、小説の脚色一篇に通ずる者は、一風・文流に始まるを謂ふべく、此の點に於いては自笑等は正しく承繼者の位地に立てるものなり。自笑と其碩とは、共に京都の書肆にして、寶永享保の頃榮えたり。其の著多くは二人の合作にかゝり、西鶴物に模して材を採ると更に廣く文を行るとますく、流暢、世に之を八文字屋風と唱へて、一時大に流行せり。其の著書數十部の中、『百性盛衰記』『風流詭平家』『世間子息氣質』『風流東大全』『風流西

るに足るものあり。但し、其の傑作中には、寫實の極、文辭猥褻に涉りて讀むに堪へざる節多し。元祿五年、五十一歳にて歿しぬ。西鶴の風牀を傳へて亦能文の譽を得し者に、西澤一風・錦文流(共に寶永享保頃の人の二人ありしが、其の所長は寧ろ淨瑠璃に在りて、小説家としては聊か後れて出でたる自笑。其碩に其の名聲を遜りき。但し、小説の脚色一篇に通ずる者は、一風・文流に始まるを謂ふべく、此の點に於いては自笑等は正しく承繼者の位地に立てるものなり。自笑と其碩とは、共に京都の書肆にして、寶永享保の頃榮えたり。其の著多くは二人の合作にかゝり、西鶴物に模して材を採ると更に廣く文を行るとますく、流暢、世に之を八文字屋風と唱へて、一時大に流行せり。其の著書數十部の中、『百性盛衰記』『風流詭平家』『世間子息氣質』『風流東大全』『風流西

海硯『商人軍配圖』等あり。自笑・其碩等の歿後、其の餘風を慕ふ者、其笑・瑞笑等の名を以てあらはれしかば、概ね先輩を模倣して更に新機軸を出さざりしかば、世間亦八文字舍物に厭き京阪の小説壇は、寶曆・明和の交に於いて其の終を告ぐるに至れり。

江戸には、貞享・元祿の頃、赤本と唱ふる草双紙の幼稚なるもの出で尋いで青本・黒本行はれしが、いつれも繪畫を主としたるものにて、一に兒童の翫弄に供するに過ぎざりき。其の後、平賀鳩溪・京阪の文學を移植するに及びて、江戸の文學は著き進歩を爲せり。即ち、天明の頃には戀川春町(二四〇)四一・二四四九、明誠堂喜三次(手柄岡持、二二九五—二四七三)、芝全交(二四五三)歿の徒出でて、類に詞壇に馳騁せり。其の著作は所謂黃表紙の小冊子にして、亦挿畫を主としたれども、寧ろ

讀者を大人にざり、滑稽の想、洒落の辭、頗る作者の才を徴するに足る。春町の『金々先生榮花の夢』、喜三次の『文武二道萬石通じ』、全交の『鼻の下長物語』等は、最も當時の嗜好に適したりといふ然れども、此の頃は未だ江戸作者の地位を高むるに至らざりしが、寛政の初め烏亭焉馬(二四〇三—二四八二)・山東京傳・曲亭馬琴等の出づるに及びて、江戸の小説界は忽ち春の到りし趣あり。就中、京傳は近世稗史の鼻祖と稱せらる。

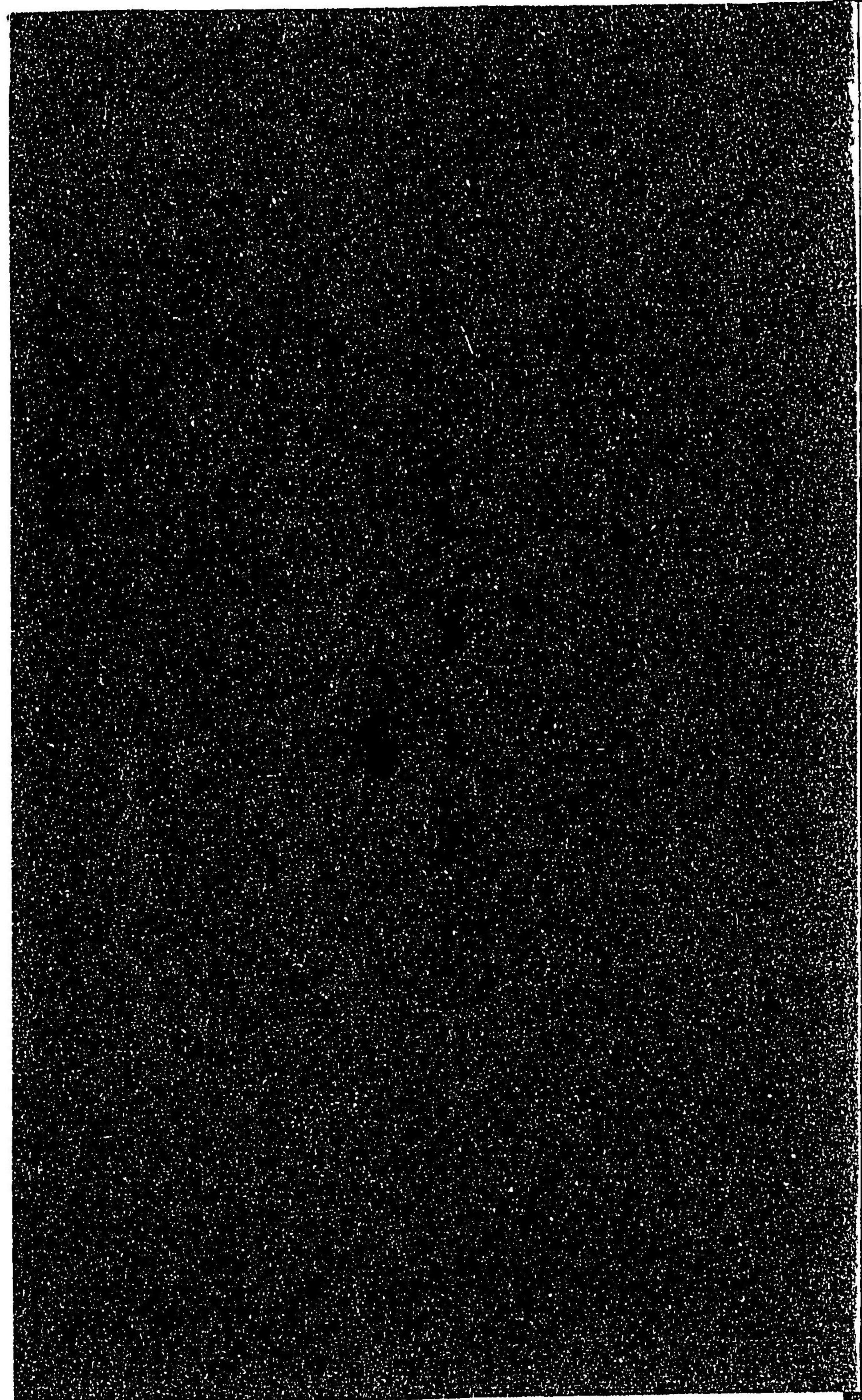
山東京傳(二四二—二四七六)は、本名岩瀬醒、江戸の商賈の子なり。壯年の頃は、放逸にして素行修まらざりしが、後専心戯作に力め、文化十三年九月七日、五十六歳にて歿せり。著す所の書數十百部。就中、『本朝醉菩提』、『稻妻表紙』、『雙蝶記』等最も行はる。又別に『近世奇跡考』及び『骨董集』の著あり。當時、

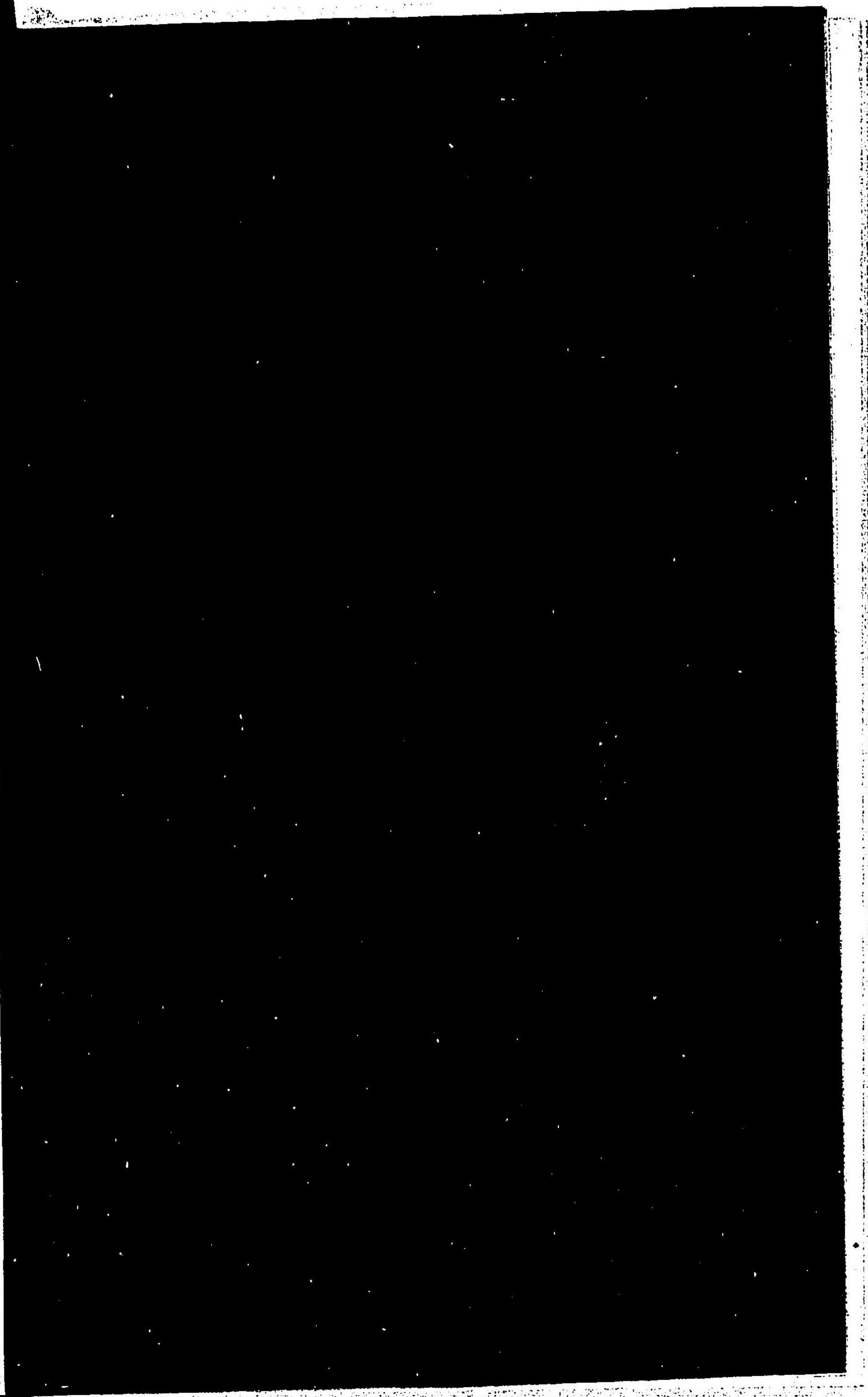
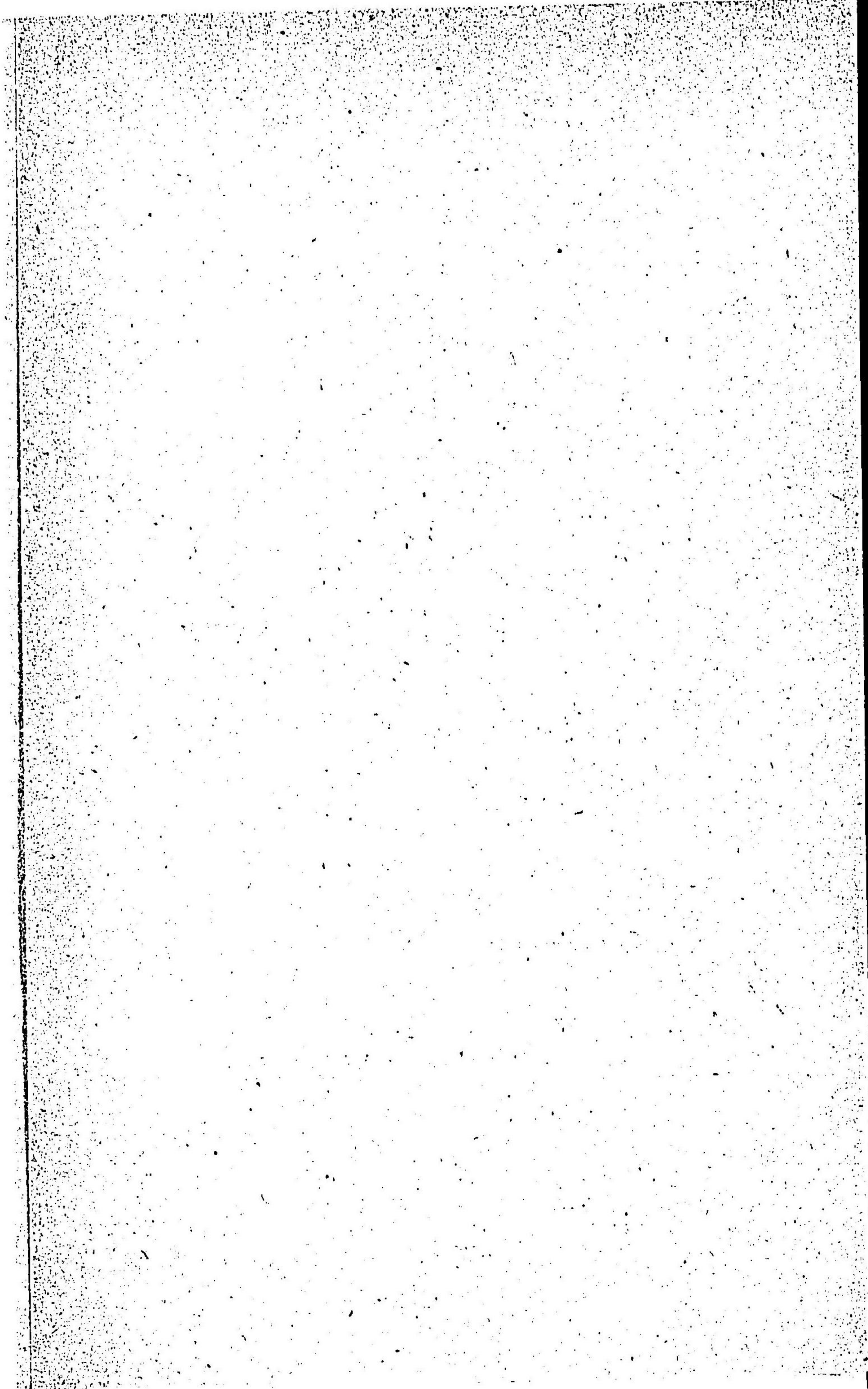
小説の作者は、大抵亦狹斜の事情を描ける所謂洒落本を物せざるはなかりき。京傳も最初は此の種の著述に筆を染め、一時頗る流行せしが、後には其の非を悟りて再び之を書かざりきとぞ。おもふに、洒落本は浮世草子の變遷し來れるものなり。これはかれに比ぶれば、一層猥陋なる所ありしを以て、寛政三年官より其の發行を嚴禁せり。京傳の門に出で、出藍の譽あるものを曲亭馬琴とす。

曲亭馬琴(二四二七—二五〇八)姓は瀧澤、名は解、江戸の人に於て、別號を著作堂主人、蓑笠漁隱、玄同陳人とも呼びたり。初め旗下の士に事へ、尋いで醫を學び、又儒を學びしかども、並に志を得ず。後京傳の許に寄食し、終に小説を以て世に立ちたり。馬琴壯歲より讀書を好み、和漢の典籍殆ど眼を過ぎざるなし。其の業に従ふや、亦勵精刻苦衆に超え、六十年の久し

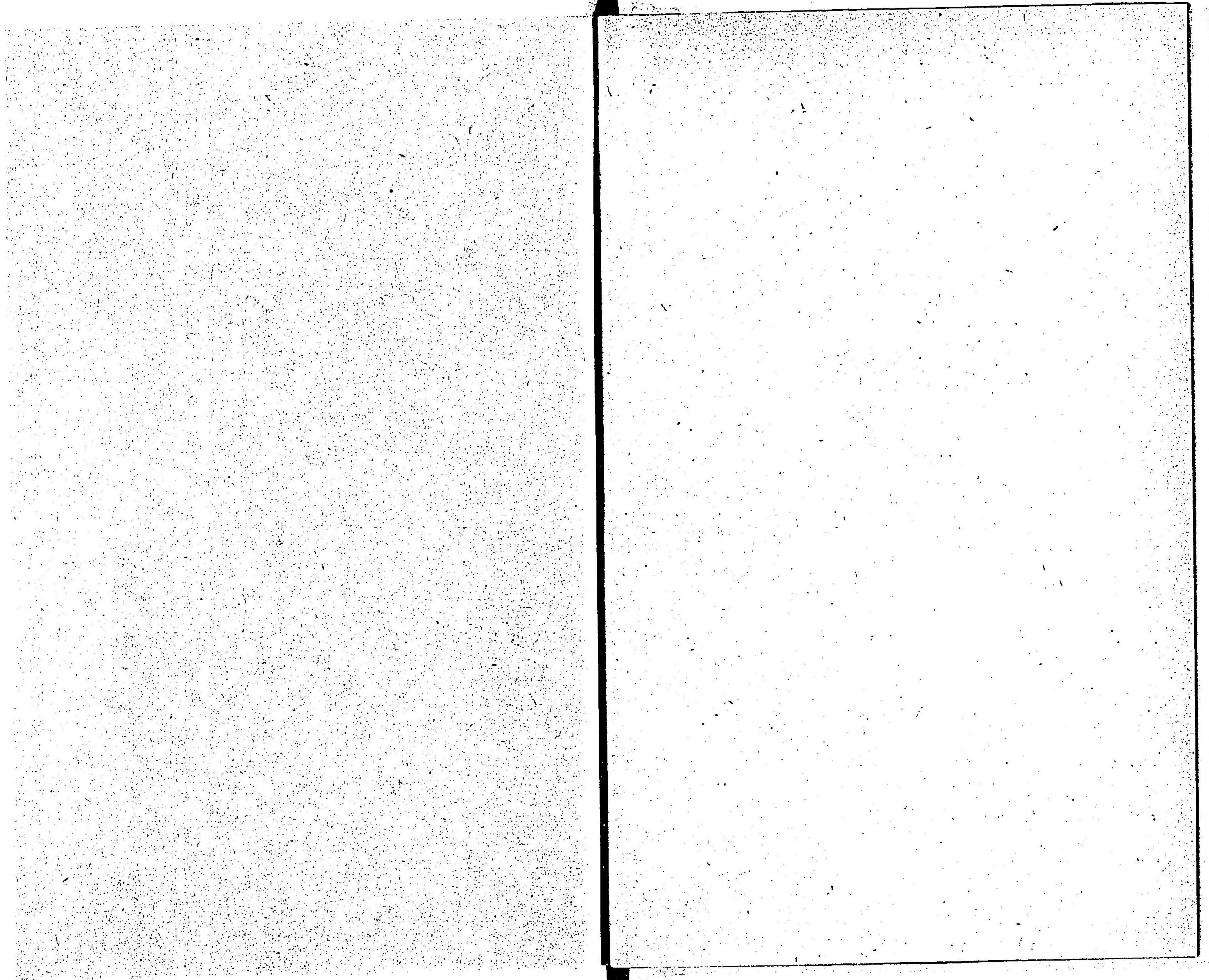
欠

MISSING









86  
80



30  
30



084881-000-8

86-80

国文学小史

和田 万吉

永井 一孝 / 著

M3 2序

DBB-0055

